

那賀郡桃山町最上所在

最上廃寺発掘調査報告

1983.3

和歌山県教育委員会

序 文

文化財は国民の共有財産であり、祖先の長い年月を経て築きあげられた足跡であります。それは自然環境や外来の文化の影響をうけつつ、個性豊かな地域文化を形成しています。

和歌山県教育委員会では文化財保護の立場から国庫補助を受けて「重要遺跡範囲確認調査」を昭和48年度から実施し、現在まで紀伊国分寺、西国分廃寺、佐野廃寺の保存を前提とした発掘調査を行ってきました。そして昭和55年度から三箇年をかけて那賀郡桃山町に所在する県下有数の白鳳時代の寺院跡といわれる最上廃寺の調査に着手しました。調査を通じて広く、最上廃寺の重要性について深い認識と理解がもたれてきていることは望外の喜びであります。これからも発掘調査の実施だけでなく、文化財保護思想の普及、啓蒙活動にも力を入れたいと考えております。

ここに、三箇年の調査結果をまとめ、最上廃寺発掘調査報告書を作成し、この報告書が広く一般に活用され、文化財保護意識の高揚に役立つことを願うものであります。

昭和58年3月

和歌山県教育委員会
教育長 高橋正司

例 言

- 1 本書は、和歌山県教育委員会が昭和55年度から三ヶ年国庫補助をうけて「重要遺跡範囲確認調査」として発掘調査を実施した那賀郡桃山町最上に所在する最上庵寺の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は和歌山県教育委員会が社団法人和歌山県文化財研究会に委託し、同研究会が実施した。
- 3 発掘調査は、最上庵寺発掘調査委員会の指導のもと、県文化財課技師藤井保夫、社団法人和歌山県文化財研究会技術員冨加見泰彦が担当した。
- 4 発掘調査・遺物整理にあたっては仏教大学学生大岡康之、桃山学院大学学生楓裕史、大阪市立大学学生横山洋、大谷女子大学学生森下牧子諸氏の協力を得た。
- 5 本書は、和歌山県文化財保護審議会委員の指導を受け、冨加見が担当した。
- 6 本書の作成には文化財課技師、社団法人和歌山県文化財研究会技術員諸氏の助言・協力を待た。
- 7 昭和55年度『最上庵寺発掘調査概報Ⅰ』、昭和56年度『Ⅱ』と内容に相違点が認められる場合は、本書をもって正式報告とする。
- 8 調査にあたっては桃山町教育委員会、地元最上地区、小林地区の方々ならびに御快承いただいた土地所有者の方々を中心に感謝申しあげる次第である。

調査の組織

最上廃寺発掘調査委員会

調査委員

羯磨 正信	和歌山県文化財保護審議会委員
巽 三郎	〃
都出比呂志	〃
藤沢 一夫	〃
竹中 一雄	桃山町文化財保護委員会委員長
仁木 正雄	桃山町教育委員会教育長
井上 至	和歌山県教育委員会文化財課長
畑村 半亮	〃 (後任)
山田 実	〃 (〃)

調査員

藤井 保夫	和歌山県教育委員会文化財課技師
富加見泰彦	社団法人和歌山県文化財研究会技術員

事務局

事務局長 海野 正幸	和歌山県文化財研究会事務局長
〃 幹事 桃野 真晃	県文化財課第2係係長
〃 主事 宮本登志夫	〃 主事
〃 森本 一臣	〃 (後任)

目 次

序 文

例 言

調査の組織

第1章 調査に至る経緯	1	YG-II区	12
第2章 位置と環境	2	OM区	13
第3章 調査の方法	8	NM区	13
第4章 遺構	9	NT区	14
第1節 塔跡の調査	9	第5章 出土遺物	15
第2節 各地区の調査	10	第1節 瓦類	15
OK区	10	第2節 土器類	19
HG区	10	1 須恵器	19
NO区	11	2 土師器	20
OS区	11	第3節 その他の遺物	21
TG区	11	第6章 まとめ	21
YG-I区	12		

挿図目次

第1図 西部縦貫道予定路線	1
第2図 周辺の遺跡	3
第3図 城ノ段遺跡出土遺物	4
第4図 尼寺出土瓦	6
第5図 調査区とトレンチ設定図	8
第6図 塔跡心礎石	9
第7図 C類軒丸瓦	17
第8図 埴仏	21

実測図目次

第1図	最上庵寺全測図	26
第2図	塔跡平面実測図	28
第3図	OK区Yトレンチ平面実測図	30
第4図	HG区Pトレンチ平面実測図	32
第5図	YG-I区地整形痕及び柱列	34
第6図	YG-I区Aトレンチ拡張区	34
第7図	YG-I区Cトレンチ平面実測図	36
第8図	YG-I区Hトレンチ平面実測図	36
第9図	YG-II区Bトレンチ掘立柱建物跡(SB-04, 07)	38
第10図	YG-II区Gトレンチ掘立柱建物跡(SB-05)	38
第11図	NT区溝1と掘立柱列	40
第12図	NT区柱穴断面	42
第13図	OM-I区掘立柱建物跡(SB-01)	42
第14図	OM-I区掘立柱建物跡(SB-02)	44
第15図	OM-I区掘立柱建物跡(SB-03)	44
第16図	出土軒丸瓦(1)	46
第17図	出土軒丸瓦(2)	48
第18図	出土軒丸瓦(3)	50
第19図	平瓦叩文様(1)	52
第20図	平瓦叩文様(2)	54
第21図	出土平瓦(1)	56
第22図	出土平瓦(2)	58
第23図	出土平瓦(3)	60
第24図	出土丸瓦	62
第25図	鷗尾片・熨斗瓦	62
第26図	伝最上庵寺出土鷗尾片・軒丸瓦	64
第27図	須臾器実測図	66
第28図	土師器実測図	68

写真図版

- | | | | |
|-----|---------------------------|-----|--------------------|
| 図版1 | 上空からみた最上廃寺と周辺 | 下 | OM区掘立柱建物跡と溝 |
| 2 | 最上廃寺全景 | 18 | 出土軒丸瓦 |
| 3上 | 塔跡基壇 | 19 | 出土軒丸瓦 平瓦 |
| 下 | 塔跡心礎石 | 20 | 出土平瓦 |
| 4上 | 塔跡の調査 | 21 | 出土丸瓦 |
| 下 | 塔跡の調査(版築の状態) | 22 | 鷓尾片 熨斗瓦 伝最上廃寺出土軒丸瓦 |
| 5上 | 塔跡基壇(心礎石と版築) | 23上 | 伝最上廃寺出土軒丸瓦 |
| 下 | YG-I区Aトレンチ地山整形痕 | 下 | 伝同鷓尾片 |
| 6上 | OK区の調査 | 24 | 六尊連立埴仏出土土器 |
| 下 | OK区トレンチ溝状遺構と段 | | |
| 7上 | HG区トレンチの調査 | | |
| 下 | HG区溝1断面 | | |
| 8上 | HG区トレンチの調査 | | |
| 下 | HG区トレンチの調査 | | |
| 9上 | NO区の調査 | | |
| 下 | OS区の調査 | | |
| 10上 | TG区の調査 | | |
| 下 | NM区の調査 | | |
| 11上 | YG-I区Iトレンチ地山整形痕 | | |
| 下 | YG-I区Cトレンチ掘立柱建物跡(SB-6) | | |
| 12上 | YG-I区Aトレンチ拡張区の調査 | | |
| 下 | YG-I区トレンチの調査 | | |
| 13上 | YG-II区A2トレンチの調査 | | |
| 下 | YG-II区Cトレンチ掘立柱建物跡(SB-5) | | |
| 14上 | YG-II区Bトレンチ地山整形痕トレンチ瓦出土状態 | | |
| 下 | YG-II区Bトレンチ掘立柱建物跡 | | |
| 15上 | NT区Uトレンチ溝1と掘立柱跡 | | |
| 下 | NT区東限の調査 | | |
| 16上 | OM区掘の調査 掘立柱建物跡と柱穴群 | | |
| 下 | 掘立柱建物跡SB-1と溝 | | |
| 17上 | OM区掘立柱建物跡(SB-2) | | |

第一章 調査に至る経緯

那賀郡桃山町最上に所在する最上庵寺は、白鳳時代に建立された県下の寺院の中では、単弁の軒丸瓦を出土することから最も古い寺院址であると考えられていた。また、この地は保元の乱の一因ともいわれる美福門院が鳥羽上皇崩御の後、当地に移り住み、尾岡に堂塔を建立したとも伝えられている。この地にはそれを証明するかのように、美福門院に追隨し、代々国司兼追捕使として当荘内を治め門院の御墓の守護を任とした奥家が今に残り、また修禪尼寺と伝えられる堂塔も今に残る。そして当庵寺を含むその周辺がその推定地の一つと考えられている。

ところが、大阪一和歌山を結び紀南へ通するいわゆる西部縦貫道路の計画が持ち上り、その計画された路線は、当庵寺の推定される寺域の一面を横切るものであったことから、これに対処するための基礎資料の必要性から昭和55年度から三ヶ年国庫補助をうけ、伽藍・寺域について明らかにするための発掘調査に着手することとなった。



挿図1 西部縦貫道予定路線

第2章 位置と環境

位置(挿図-2) 最上庵寺は那賀郡桃山町最上字西上ノ段に所在する白鳳時代の寺院址である。

桃山町は名の通り桃の産地で三波川系に属する緑泥角閃岩を主体とする結晶片岩によって構成された龍門山系の山裾にあたり、北は紀ノ川がゆっくりと西流し、西はその支流である貴志川が南から北へ流れている。町の中央部は龍門山系の主峰である龍門山に源を発する拓榴川が東から西へ貫流する。庵寺の立地する最上台地はこの三河川の浸蝕によって河岸段丘化したものと考えられ、比高差は約30メートルを計る。

この地一帯は古くは荒川郷と呼ばれ「古事記」「日本書紀」にすでにその名があらわれ、大和政権との深い関わりが考えられるところである。荒川郷はその後、安楽川莊として後世に引き継がれている。

庵寺は段丘の最奥部——龍門山系の取休山の北麓に立地し、東は取休山から張り出した小尾根によって画され、北には深い浸蝕谷が迫るという状況の中で造営されている。以下、周辺の歴史的環境についてふれることにする。

先土器時代 堂坂遺跡・岡田遺跡等が知られている。いずれも紀ノ川北岸にあたる。堂坂遺跡は紀ノ川に突き出した断崖上にあり、ナイフ型石器・小型船底形石器・石核が出土している^(註2)。佐川をはさんで北西 m の微高地上に位置する上野遺跡からは木葉形の尖頭器が地下2～3メートルで発見されている。岡田遺跡は和泉山脈から南流する小河川によって形成された扇状地に位置し、柳葉形の尖頭器・エンドスクレイパーが出土している^(註3)。いずれも偶然性によるものが多く遺跡の実体まで把握するまでには至っていない。

縄文時代 北岸では前述の堂坂遺跡・岡田遺跡さらに隣接する西国分Ⅱ遺跡、和泉山脈の南麓に位置する福琳寺西遺跡・登尾遺跡・枇杷谷遺跡等が知られ、南岸は取休山山麓の小林遺跡・貴志川左岸の茶屋御殿山南麓に西ノ側遺跡が知られる。^(註4)

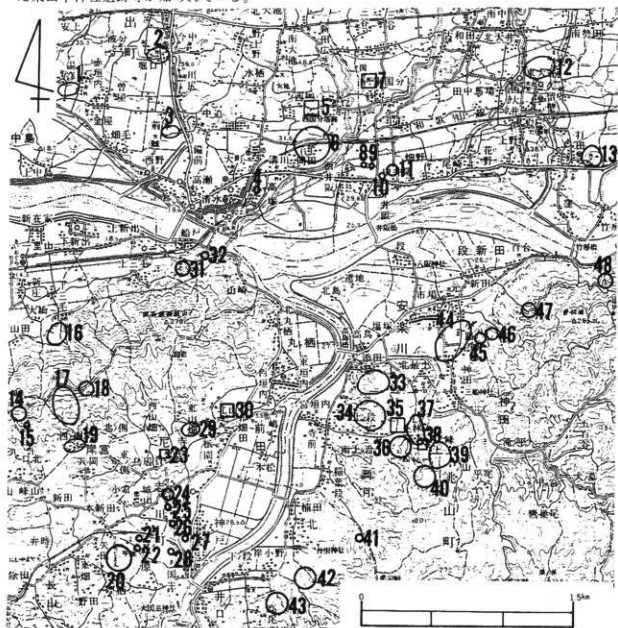
堂坂遺跡では中期～晩期の土器の他に尖頭器・スクレイパー・石鏃・石斧・石錘・礫器等の石器が出土し、岡田・西国分Ⅱ遺跡も中期～晩期にかけての土器と石鏃・石錘等の石器が出土している。福琳寺西遺跡からは草創期とみられる有舌尖頭器が出土している。登尾遺跡は尖頭器を含む多量の石鏃を出土し、草創期～中期まで続いた石器制作地と考えられている。枇杷谷遺跡は中期～晩期にかけての石鏃と晩期の土器が出土している。

小林遺跡は石鏃の出土が知られ、西ノ側遺跡からは有舌尖頭器やスクレイパーが出土するがいずれも不明な点が多い。

弥生時代 この一帯は紀ノ川では中流域にあたる。これまで前期の土器は海岸線や島嶼に多く紀ノ川を逆のぼるのは中期になってからであると一般に考えられていたが、最近の調査で、堂^(註5)

坂遺跡や岡田遺跡で検出され始め、それらは縄文時代の遺跡と重複していることも明らかになってきている。今後更に前期の遺跡が発見され、新たな展開を見せることは十分に考えられる。

中期の遺跡は右岸では堂坂・岡田両遺跡の他に紀ノ川支流の佐川の東岸の微高地上に営まれた東田中神社遺跡等が知られている。

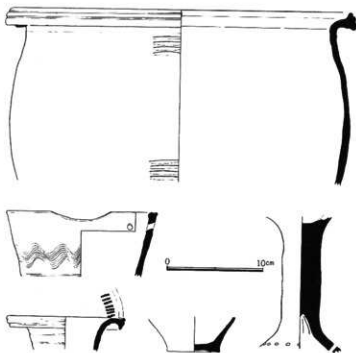


- | | | |
|----------------------|-----------------------|---------------------|
| 1 山崎遺跡 (古墳時代～奈良時代) | 17 摩宮尔肥遺跡 (奈良時代～鎌倉時代) | 33 城ノ段遺跡 (弥生時代) |
| 2 堂田遺跡 (弥生時代) | 18 長東遺跡 (古墳時代) | 34 城上遺跡 (弥生時代) |
| 3 新木遺跡 (〃) | 19 西ノ新遺跡 (縄文時代) | 35 城上塚寺 (奈良時代) |
| 4 高塚古墳 (古墳時代) | 20 平地古墳群 (古墳時代) | 36 小杉古墳群 (古墳時代) |
| 5 西田分蔵寺 (奈良時代) | 21 城山古墳 (〃) | 37 土丘遺跡 (弥生時代～古墳時代) |
| 6 岡田遺跡 (縄文時代～奈良時代) | 22 双子三味塚古墳 (古墳時代) | 38 奈良時代瓦出土地 (奈良時代) |
| 7 同分寺 (奈良時代) | 23 尾寺観音寺跡 (古墳時代) | 39 小林遺跡 (縄文時代) |
| 8 無名塚古墳 (古墳時代) | 24 上野山古墳群 (古墳時代) | 40 西ノ池古墳群 (古墳時代) |
| 9 じょう穴古墳 (古墳時代) | 25 丸山古墳 (〃) | 41 喜能原塚跡 (〃) |
| 10 八幡塚古墳 (〃) | 26 権田古墳 (〃) | 42 北古墳群 (〃) |
| 11 三味塚古墳群 (〃) | 27 三味塚古墳 (〃) | 43 高尾山古墳群 (〃) |
| 12 東山遺跡 (奈良時代) | 28 鎌子塚古墳 (〃) | 44 元遺跡 (弥生時代) |
| 13 東田中神社 (弥生時代～古墳時代) | 29 北山遺跡 (〃) | 45 七塚古墳群 (古墳時代) |
| 14 七ノ塚古墳群 (古墳時代) | 30 北山塚寺 (奈良時代) | 46 蔵山古墳群 (〃) |
| 15 上瀬古墳 (〃) | 31 柳ノ山古墳群 (奈良時代) | 47 百合山古墳群 (〃) |
| 16 舊山田遺跡 (平安時代) | 32 稻山古墳 (〃) | 48 竹原古墳群 (〃) |

挿図2 周辺の遺跡

堂坂遺跡は中期全般に渡って広く遺物が検出され、岡田遺跡の場合は第Ⅲ様式に盛行するであろうことが調査の結果から推察されている。東田中神社遺跡は堂坂遺跡とは同一微高地上に位置し、過去に第Ⅳ様式に属する円形竪穴住居が調査されている。^(註6)

南岸では城ノ段遺跡が最上廃寺と同じ河岸段丘に位置し、貴志川と紀ノ川を一望できる段丘の北西端に立地している。第Ⅳ様式後半の土器(挿図-3)が多く遺物の散布範囲も広域でかなりの規模が考えられる。



挿図3 城ノ段出土土器

前述の堂坂遺跡は紀ノ川の川幅が極端に狭くなる地点の河岸段丘の先端に立地し、城ノ段遺跡は見通しのきく段丘上に立地することから共に紀ノ川を意識した集落と考えられ、高地性集落としての性格が考えられるところである。

後期の遺跡は今のところ顕著でなく、前述の堂坂・岡田・東田中神社・城ノ段各遺跡等には集落は営まれていないようである。今のところ貴志川西岸の楠田遺跡が後期を中心として営まれているようであるが、その実体は尚、不明な点が多い。^(註7)

古墳時代 集落遺跡では前述の東田中神社遺跡があげられる。弥生後期に空白が見られるものの古墳時代前期には再び集落が営まれるようになる。他に貴志川東岸の微高地上に立地する神戸遺跡や前田遺跡で土師器・須恵器が出土する。立地等からして集落遺跡と考えられるが、実態については今のところ不明である。

しかしながら古墳は比較的多く築造されており、それだけの基盤は持っていたと考えられる。

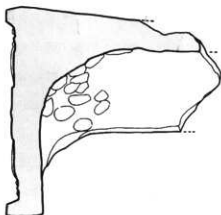
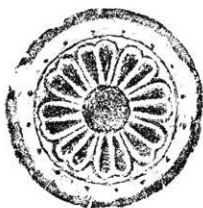
- ① 紀ノ川北岸の河岸段丘上に立地する古墳。
- ② 南岸の龍門山系の山々の尾根筋や中腹に立地する古墳。
- ③ 御茶屋御殿山・鳩羽山の尾根筋や中腹に立地する古墳。
- ④ 貴志川西岸の河岸段丘上に立地する古墳に大別できる。

①の古墳としては「紀伊統風土紀」や「紀伊名所図絵」「史蹟名勝天然記念物調査報告」にもその名が見える八幡塚古墳をはじめ三味塚古墳群、さらに現在は消滅しているが、じゅあな古墳・無名塚古墳・黒土古墳がある。この中で八幡塚古墳・黒土古墳は周濠をもつ円墳で二

つの時期の異なる埋葬施設（組合式箱式石棺と横穴式石室）を持つ多葬墓でこの平地の古墳の中で重要な意味をもつものと考えられている。^(註8)一方②の古墳では竹房古墳群・百合山古墳群・観音山古墳群・神田古墳群・西ノ池古墳群・小林古墳・尼ヶ岡古墳・北古墳群・高尾山古墳群がある。竹房古墳群は最初ヶ峰の北斜面に点在し通称「八ツ塚」と称され、1号墳は石棚をもつ古墳としては最も東に位置している。径約20mを計り、遺物からは6C後半の築造と考えられている。^(註9)百合山古墳はは同峰の北西麓に立地している。「七ツ塚」と呼ばれていたがその大半は消滅している。その中で1、2号墳についてはある程度知られている。1号墳は横穴式石室を埋葬施設に持つ円墳で開口時には銀環・玉類・刀・土器類が豊富に出土している。遺物から6C後半の築造と考えられている。2号墳も横穴式石室を埋葬施設に持ち環頭大刀玉類・刀子・鉄鏃・土器類が出土し、6C前半の築造と考えられている。その他、谷一つ隔てた丘陵部には観音山古墳群・神田古墳群が存在するが、前者は横穴式石室を埋葬施設に持った円墳と伝えられるが実態は不明な点が多い。後者も1号墳が開口し、横穴式石室を持つ円墳であることが知られている以外は不明である。廃寺の南側に位置する取休山にはかつて西ノ池古墳群・小林古墳・尼岡古墳が存在したが、小林古墳を残しては消滅している。小林古墳は小竪穴を埋葬施設に持つと思われる径11mの円墳で、直刀が出土したと伝えられている。北古墳群・高尾山古墳群は貴志川を望む丘陵部に立地している。北古墳群は現在5基が確認され、そのうち1号墳は横穴式石室を持つ古墳で、石棚を有する径20mの円墳であることが知られている。^(註12)高尾山古墳群はそのほとんどが消滅したが10基余りの小円墳からなっている。調査された1号、3号墳は横穴式石室、2、4号墳は小竪穴式石室を埋葬施設に持っている。築造は6C前半～後半にかけてと考えられている③の古墳としては御茶屋御殿山から北に派生した尾根上に箱山古墳を含む8基からなる船戸山古墳群がある。箱山古墳は並列する横穴式石室二基とその背後に竪穴式石室三基の埋葬施設を有し、豊富な遺物が出土している。当古墳ほど多くの埋葬施設を有する例は少なく当時の家族構成を解明する上で重要な古墳といえる。さらに、尾根続きの鳩羽山の南斜面には具東塚古墳群・七ツ塚古墳群が存在する。共に7世紀後半の終末期の古墳である。^(註14)④の古墳では前方後円墳と考えられる三味塚古墳さらに笛子塚古墳・丸山古墳があり共に築造は5C代と考えられている。この古墳を築造できる基盤は、さらに歴史時代へと引きつがれ、寺院の造営に向けられたと考えられる。

歴史時代 紀ノ川・貴志川をはさんで対峙するかのよう最も廃寺・北山廃寺・西国分廃寺が位置する。これら三廃寺は互いに単弁軒丸瓦を有するという共通点が認められる。北山廃寺は貴志川西岸・鳩羽山東麓の舌状地に立地している。塔跡が現存しており、地形的状件、現地に残る小字名から法隆寺式伽藍配置を示すと考えられている。^(註20)西国分廃寺では7種の瓦が検出されており、存続期間の長い寺院であったことが知られている。^(註17)単弁軒丸瓦は文様構成からは

三廂寺の中で最も先行した寺院であるといわれ、出土する他の遺物の年代からいえるのである。薬師寺創建時の瓦が出土することから、紀ノ川沿いで指導的地位をもっていたといわれる。



挿図4 尼寺出土軒瓦

ところで、この西国分廂寺の東0.8kmにはかつてその章容を誇ったであろう紀伊国分寺が存在する。昭和48年から50年にかけて調査が行われ金堂・講堂・塔・鐘楼・僧房・軒廊・中門が確認されている。寺域は二町四方で90尺単位で8等分され、その両側の魯が主要伽藍に、魯が雑舎等にあてられたと考えられている。また、紀伊国分寺に使用された軒瓦が淡路国分寺と同范である事実も指摘され、紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊予・土佐国の南海道を一つのグループとして造立されていることも予想されるに至った。

西国分廂寺に隣接する岡田・西国分II遺跡は掘立柱建物跡が多数検出されている。建物の方向等に西国分廂寺検出の掘立柱建物跡と共通性が認められることから、寺院建立の地方豪族の居住区かあるいは大規模な建物跡も検出されていることから都衛跡の可能性も考えられている。いずれにしてもこの地は古代那賀郡にあっては一大中心地となっていることは事実である。

最上廂寺周辺では、最上遺跡からこの時代の遺物が広い範囲にわたって検出される。花王院池・佐曾池という深い浸蝕谷に囲まれた緩斜面に立地し、廂寺に極めて近いところから何らかの有機的関連の深い遺跡といえる。

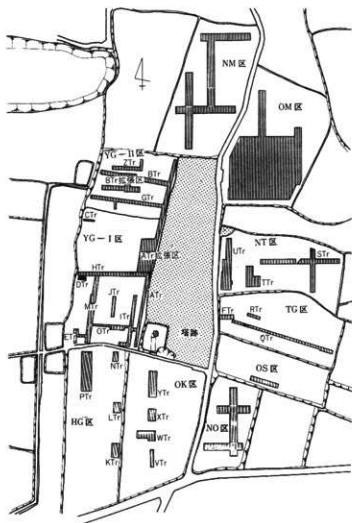
取休山東麓では古瓦を出土する地点がある(挿図-4)。小字名を尼寺と称し、美福門院没後、尼岡御所が改修され、寺として修禪尼寺と称されたと伝えられるが、出土した古瓦との年代が合致せず先行する寺院あるいは瓦窯址等の存在が考えられる。尚、この古瓦については打田町東大井遺跡、前述の西国分廂寺塔跡出土の瓦と同范であることから、今後の研究課題として残るものである。

註釈および参考文献

- 註1 「御真木入日子忠命、坐師木水垣宮、治天下也、此天皇、娶木国造名荒河刀弁之女 刀弁二字以在
遠津年魚目々微比売、生御子、豊木入日子命、次豊鉏入日亮命(後略)」『古事記』中、「二月辛
亥朔丙寅、(中略)又紀伊国荒河戸群女、遠津年魚眼妙媛、生豊城入彦命、豊鉏入姫命、
(後略)」『日本書紀』五
- 註2 「堂坂遺跡」『打田町史』第一卷史料編Ⅰ 打田町
- 註3 「岡田・西国分Ⅱ遺跡発掘調査概報」 1981年 岩出町教育委員会
「岡田遺跡発掘調査概報Ⅲ」 1982年 岩出町教育委員会
- 註4 「福琳寺西遺跡」『打田町史』第一卷史料編Ⅰ 打田町
「紀ノ川用水建設事業に伴なう発掘調査報告書」 1980年 和歌山県教育委員会
「登尾遺跡」『打田町史』第一卷史料編Ⅰ 打田町
「枇杷谷遺跡」『打田町史』第一卷史料編Ⅰ 打田町
- 註5
- 註6 「東田中神社遺跡現地説明会資料」 1977年 和歌山県教育委員会
- 註7 「楠田遺跡」『貴志川町史』第三卷史料編Ⅱ 1982年 貴志川町
- 註8 「八幡塚古墳」『打田町史』第一卷史料編Ⅰ 打田町
- 註9 「竹房古墳の調査」『和歌山県埋蔵文化財情報』15号 1980年 和歌山県文化財研究会
- 註10 「百合山古墳群」『打田町史』第一卷史料編Ⅰ 打田町
- 註11 「神田古墳群」 1982年 和歌山大学考古学研究会
- 註12 「北古墳群」『貴志川町史』第三卷史料編Ⅱ 1982年 貴志川町
- 註13 「高尾山古墳群」 1957年 和歌山大学考古学研究会
- 註14 「船戸箱山古墳緊急発掘調査概要」『きのくに文化財』第八号 1974年 和歌山県文化財研究会
- 註15 「具東塚古墳群」『貴志川町史』第三卷史料編Ⅱ 貴志川町
- 註16 「七ツ塚古墳群」『貴志川町史』第三卷史料編Ⅱ 貴志川町
- 註17 「西国分庵寺現地説明会資料」 1977年 和歌山県教育委員会
- 註18 「上野庵寺の調査」『佛教藝術』142号 1982年 毎日新聞社
- 註19 註18参照
- 註20 「北山庵寺」『貴志川町史』第三卷史料編Ⅱ 1982年 貴志川町
- 註21 「紀伊国分寺跡」『打田町史』第一卷史料編Ⅰ 打田町
- 註22 註3参照
- 註23 「北大井遺跡」『打田町史』第一卷史料編Ⅰ 打田町

第3章 調査の方法

現存する塔跡基壇以外、他の主要伽藍および寺域等について不明であったため、初年度は主要伽藍の確認および寺域の範囲確認にその重点を置いた。調査する塔跡を含むその周辺の田畑・果樹園について便宜上略号を冠し、それを地区名とした。地区名は右図のとおりで、初年度はKZ区(塔跡)、NO区、TG区、NT区、OM区、YGI区、II区、NM区について調査を行なった。調査については塔心礎は原位位置を保っていると考えられたので、心礎石の舍利孔を原点とし、真北に沿って割付を行なった。方位はそれぞれ東西南北をE・W・S・Nであらわしそれに続く数字1、2、3……は舍利孔からの距離を示すようにした。例えばN30E30は舍利孔から北へ30m、東へ30mの地点という意味



挿図5 調査区とトレンチ設定図

である。調査は原則として割付に沿って巾3mのトレンチを設定し、遺構が確認された場合は拡張して調査を実施することにした。しかし、調査区に収穫樹がある場合、そのトレンチの設定は状況にあわせ任意とならざるを得なかった。

二年目の調査は塔跡西側のYG-I区とその南側に位置するHG区について実施した。YG-I区については初年度の調査で塔跡北側において東西に延びる溝状遺構を検出していたため、金堂・講堂等の存在が考えられたからである。HG区については南限等についての調査のためである。YG-I区についてはトレンチの設定は任意となり、HG区については割付線に沿ってトレンチを設定した。

三年目の調査は過去二年間調査が実施できなかつたOK区、NT区(一部)と補足調査とし

てYG-II区、TG区について行なった。

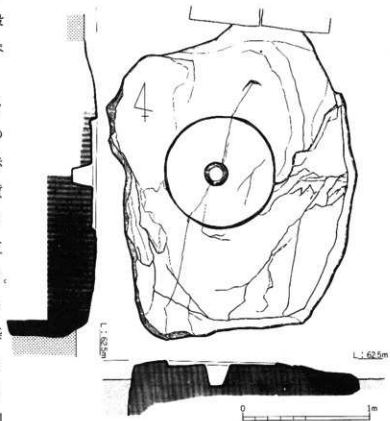
第4章 遺 構

第1節 塔跡の調査(挿図5、第一図、図版3～5)

塔基壇と心礎石は、最上共同墓地の南西隅に東西12m、南北9mの規模を持って現在に残っている。心礎石は地表に露呈している部分での計測値は東西1.8m、南北2.2mを測り、主軸はやや西に偏し、胴張った長方形を呈している。石材は、紀ノ川南岸に広く分布する結晶片岩の巨石を用い、大部分は自然面を残すが、上面は雑にはあるがある程度平坦に加工し、中央部には径0.85m、深さ0.05mに掘りくぼめた円形柱座が設けられ、さらに中心部には径0.18m、深さ0.15mの舎利孔が穿たれている。基壇上にはその他整形痕の認められる結晶片岩の巨石が4乃至5個あるがいずれも原位置は保っていない。

調査は、基壇が江戸時代以降現在に至るまで墓所として利用されているため、全面調査が不可能で、そのためトレンチによる部分調査にとどまらざるを得なかった。トレンチは割付に沿って心礎の南側と、基壇の西側(YG-I区)に南北方向に任意のものを設定した。残念ながら東西方向にはスペースがなく設定できなかった。

基壇上に設定したトレンチは基壇を断割って地山面まで掘り下げた。その結果、基壇を構築するにあたって、赤黄色を呈する地山に瓦片と灰褐色粘質土で整地を行ない、その上に版築によって黄色粘質土と灰茶色砂礫土を交互に叩きしめ、堅固に基壇を築いている。従って地山を掘り込んで版築を行なう掘込み地業は行なわれていない。版築によって築かれた各層の厚さは3～5m程度で、計19層ある。心礎石の厚さは約0.6mで、同じ石材の結晶片岩の割石を根石として用いている。心礎石の



挿図6 塔跡心礎石

周囲には、掘方の痕跡がないところから、約0.7m基壇が積上げされた版築作業の段階で根石を敷き、その上に心礎石を据えたのち、再び互層に所安の高さまで築きあげていると考えられる。

基壇の規模、方向等については、心礎から南約5mの位置で瓦溜りを検出し、約0.7mの比高差を持ち基壇が下るため基壇縁とも考えられるが瓦溜りに近世遺物が混入しているところから確証はない。土層断面においてもそれは確認できなかった。しかし、現地形を観察し、測量の結果から東・西・北の各辺は約4.5mと南辺に比べやや短いもの等間であることから、一辺10m前後の基壇を想定するのも可能であろう。Aトレンチにおいて心礎から、7.5mの位置に約5cmの比高差を持ち南北に延びる段を検出した。この段は、土層断面の観察においても心礎から北7.5mの位置に溝状遺構として確認できることから、一辺15mに区画された塔に付随する何らかの遺構と考えられる。そうした場合、可能性としては基壇縁の痕跡も考えられるが、この遺構に全く瓦が堆積していない点、規模が大きすぎる点からむしろ基壇を取りまく排水溝等を想定するのが妥当であると考えられる。

第2節 各地区の調査

OK区（第2図、図版6）

塔跡基壇の南に位置する地区である。OK区の南端は取休山の山裾がせまり、現有道路からは約2mの比高をもって低くなっている。東側も小丘陵が張り出しており1～2mに至る比高差がある。OK区の調査はNS—Oの割付線に沿って4本のトレンチを設定し行なった。北から順にY、X、W、Vトレンチである。

Yトレンチ 表上の下0.5mは客土となる。この客土中にも瓦片が混入している。この客土を除去すると地山面となる。遺構としては明瞭なものはほとんど検出されていない。わずかに溝状遺構と柱穴、不整形の土塊等である。遺物は遺構に伴うものとしては不整形土塊から須恵器の杯身が1点出土している。

Xトレンチ 土層的には前述のQトレンチと変化はない。地山のレベルについては若干高くなる。遺構については奈良時代と考えられるものはなく、近世以降と思われる柱穴が二個検出されたのみである。遺物は客土中に瓦片を比較的多く含んでいる。

Wトレンチ 地山はY、X両トレンチに比べ高くなっており、W3に沿って、すなわちトレンチに平行にこの地山が西へ傾斜していることが判明した。また、この傾斜に沿って溝状の遺構も検出している。しかしながら、この傾斜が人為的なものであるか否かは遺物等の出土も皆無であるところから不明といわざるをえない。溝状遺構についても同様なことがいえる。

Vトレンチ 遺構、遺物については検出されなかった。表土を除去すると赤褐色の地山となる。

HG区（第3図、図版7・8）

OK区の西側に位置する地区である。南側はOK区同様取休山の山裾がせまっておき、現道路からは約1.5mの比高差を持って低くなっている。地区の西端は南北に延びる段状地形を示しており、約2.5mの比高地を持ってHG区が高くなっている。調査は4本のトレンチを設定し行なった。それぞれP、N、L、Kトレンチである。

Pトレンチ(第1・4図、図版7) 検出された遺構は溝状遺構が3条である。この中でSD-3は近世のものである。SD-1はS9の位置に東西方向に検出されW30で北へ「L」字に曲がると考えられる。巾1.8m、深さ0.1mを計り、覆土は灰褐色砂質土で、覆土中には瓦片を含んでいる。SD-2の覆土は茶褐色粘質土を呈し、巾15m、深さ5cmの溝である。

Nトレンチ(第1図、図版8上) Pトレンチで確認した溝状遺構(SD-1)の広がりを調査するために設定したトレンチである。さらに東へ延びることが判明した。

Lトレンチ(第1図、図版8下) 寺城の調査を行なうためにS30の地点に設定したトレンチである。地山面まで表土下1.5mである。地山の形状は平らである。遺構は検出されなかった。遺物は客土中に若干含まれる程度である。

Kトレンチ(第1図) Lトレンチ同様S48地点に設定したトレンチである。地山のレベルはLトレンチとほぼ同一である。遺構については検出できなかった。

NO区(第1図、図版9上)

取休山から派生したと考えられる小尾根上にあたる。現在は開墾されており平坦地となっているが、OK区よりは約2.5m高くなっている。トレンチはE30に沿って南北方向に設定し、それに直交するようにS30とS48に沿って各1本トレンチを設定した。トレンチによる状況では、耕作土・床土・客土・赤褐色地山となり、南北方向のトレンチでは遺構は検出されなかった。遺物としては時期不明の鉛玉(鉄砲玉)が検出されたのみである。地山は南が高く、北へ向かって緩斜面をしめす。

OS区(第1図、図版9下)

東西方向に任意のトレンチを設定した。現表土を除去すると直下は赤褐色の地山となる。遺構・遺物は検出されなかった。

TG区(第1図、図版10上)

初年度の調査で西端に1本のトレンチを設定し、第3次の調査で2本のトレンチを設定した。F、R、Qトレンチである。

Fトレンチ 現地表より約1m下で地山となる。遺構・遺物は検出されなかった。

Rトレンチ 東限を調査するために設定したトレンチである。調査の結果巾50cmの溝を1条検出したが、Qトレンチでは検出できず、広がりを持ったものではないと考えられる。地山は前記のFトレンチからRトレンチ東端にかけてゆるやかに登り勾配となっており、その比高差は

約0.5mを計る。東限を示すような遺構の痕跡は認められなかった。

YG-I区の調査(第4~9図、図版11~14)

塔跡の西側に位置する地区である。果樹畑となっているためトレンチの設定は任意であり、調査した面積も限られた。調査はA・C・D・E・H・I・J・M・O各トレンチとAトレンチ拡張区を行なった。

Aトレンチ、Aトレンチ拡張区(第6図、図版12上) AトレンチはYG-II区にもまたがるため、便宜的にYG-I区をA₁、YG-II区をA₂とする。前者については「塔跡の調査」の項でふれているため重複を避ける。他の遺構についてはN24の位置で東西に延びる浅い溝と瓦溜りの一部を検出した。溝は幅50cm、深さ5cmを計る。覆土は灰褐色砂質土である。遺物は含まれていない。拡張した結果では溝は自然消滅しているため性格については不明といわざるを得ない。N36では東西方向の地山の整形痕を検出した。

Cトレンチ(第7図、図版11下) 一列に並ぶ柱穴・溝・土壌を検出した。柱穴は三間分検出した。柱間は1.5m、1.5m、1.1mである(SB-6)。溝はBトレンチ、Gトレンチで検出されたものの延長と考えられ覆土中には瓦片を含んでいる。土壌は掘方が方形を呈しており、あるいは掘立柱建物の柱跡であるかもしれない。

Dトレンチ(第1図) 浅い方形の土壌を一基検出した。Cトレンチと同様柱跡の可能性がある。Hトレンチ(第8図、図版12下) 柱穴、土壌を検出した。柱穴は北側に位置するものが3m間で、南側のものは2.7mであるトレンチ西端W30では南北方向の浅い段を検出した。

Iトレンチ(第5図、図版11上) 地山の整形痕(溝状遺構)と柱列を検出した。整形痕は約8度東へ偏している。柱穴も整形痕に平行するが不揃いである。P・Nトレンチで検出されたSD-1と同一であるならば東西18m・南北18mのやや不整形ながら「 \square 」字形を呈す。遺物は出土していない。

Jトレンチ(第1図) 東西に延びる幅40cm・深さ20cmの溝を検出した。方向からはIトレンチの続きであるか否かは断定できない。

Mトレンチ(第1図) Hトレンチにまたがる土壌を検出した。土壌内からは瓦と中世の土器が出土した。E・Oトレンチについては遺構は検出されなかった。

YG-II区の調査(第8・9図、図版13・14)

YG-I区の北側にあたる。この地区も果樹園となっているためトレンチの設定は任意である。調査はA₂・B・G・Z各トレンチとBトレンチ拡張区を行なった。

A₂トレンチ(第1図、図版13上) 東西に延びる地山の整形痕とそれに伴う瓦溜りを検出した。

Bトレンチ(第9図、図版14) A₂トレンチの地山の整形痕と瓦溜りの延長線上にあたる。地山整形痕は約5度南へ偏している。一方、これに重複して掘立柱建物跡2棟(SB-04・07)

を検出した。

S B-04(第9図)桁行は三間(4.8m)、梁行は一間以上(1.5m以上)の規模を持つ。方位は約4.5度東に偏している。柱間寸法は桁行1.6m等間、梁行1.5mである。柱掘方は50~70cm前後の方形で、柱痕跡の径は約25cmを計る。

S B-07(第9図)S B-4に重複する。重複関係はS B-07が新である。桁行1間(2.4m)、梁行3間(6.3m)を確認した。方位は約11度南へ偏している。柱間寸法は桁行2.4m、梁行2.1m等間である。柱穴は40~50cmの階円形である。

Gトレンチ(第10図、図版13、下)Cトレンチへつながる溝と掘立柱建物跡?を検出した。建物4間分て南へ3度偏している。柱間方法は東から2.3m、1.8m、2.3m、1.8mである。柱掘方は60~70cmの方形で、柱痕跡の径は約25cmである。

建物の柱間方法・方位から互いに別の建物と考えられる。

Zトレンチ・Bトレンチ拡張区においては前述の建物等は検出されなかった。

OM区(第12~14図、図16・17)

N60・E45に沿って直交する巾3mのトレンチを設定し調査を行なった。地山は南側で浅く、耕作土下0.3m北に従って深くなり1.2mを測る。トレンチによる調査で掘立柱建物を検出したため拡張して調査を行なった。その結果、検出した遺構は大半が南側に集中する。掘立柱建物3棟、溝5条、土壇1基、時期不明の柱穴群がそれである。

S B-01(第13図、図版16下)桁行二間(2.6m)、梁行二間(2.6m)の南北に棟をもつ掘立柱建物跡である。方位は真北より10度東に振れている。柱間寸法は桁行1.3m等間、梁行1.2m・1.4mである。柱掘方は一辺0.3~0.4mの方形を呈し、深さは0.1m、柱痕跡の径は0.12mを計る。

S B-02(第14図、図版17上)S B-1の北東に隣接している。桁行二間(3.5m)、梁行二間(3m)の東西に棟をもつ掘立柱建物跡である。方位は真北より4度東に振れている。柱間寸法は桁行1.75m等間、梁行1.5m等間である。柱掘方は0.6×0.5mの長方形を呈し、深さは0.25m、柱痕跡の径は0.25mを計る。

S B-03(第15図、図版17下)S B-2に隣接している。桁行二間(3.4m)、梁行(2.7m)の東西に棟をもつ掘立柱建物跡で、総柱である。方位は真北より10度東に振れている。柱間寸法は桁行1.7m等間、梁行は1.35m等間である。柱掘方は0.5~0.75の方形ないし長方形を呈し、深さは0.25m、柱痕跡の径は0.2~0.25mを計る。

溝状遺構(第1図、図版16下)「L」字に屈曲する溝がN60E30の地点で検出した。幅約30cm、深さ約20cmを計る。覆土は灰褐色砂質土で、遺物は全く含んでいない。

NM区(図版10下)

時期不明の東西に延びる幅0.7m、深さ0.3mの溝と、0.9×0.9mの規模をもつ柱掘方?を検

出した。また、旧地形として谷状地形を検出している。この谷状地形には瓦片等の白鳳のものから、瓦器に至る中世の遺物まで認められる。このことから中世の段階で旧地形が整地されたのではないと思われる。

N T区 (第10・11図版15)

初年度の調査では、遺構・遺物は検出されていないが、瓦が過去に多量に出土したとの地主の話から西端部について調査を行なった。その結果、溝状遺構を検出した。溝は塔基壇の方位と同一で約5度東に振れている。溝内には瓦片が認められるが、量はさほど多くはない。溝は方向的にはOM区のL字に曲がる溝とつながり、さらにYG-II区で検出されている瓦溜りにも続くことが考えられる。この一連の溝はあるいは主要伽藍等を取り囲む区画性をもったものと考えられる。

掘立柱列(第11、12図) 溝の東側で検出した。柱間は1.8mで掘方の規模は約60cmで、深さも約60cmである。北側の柱穴には抜き取り穴が認められ、南側の柱穴には抜き取られた後のものと考えられる片岩系の自然石が掘方上に据えられた状態で検出された。柱列は二個分で、その広がりについて追求したが調査範囲の中では課められず、性格については不明である。さらに、寺域を確認するため東西方向にトレンチを設定したが、遺構・遺物は検出されなかった。

第5章 出土遺物

瓦類（第15～25図、図版18～23）

軒丸瓦 調査で出土した二種（A、B類）と表採の一種（C類）の計三種類が明らかになった。従来、最上廃寺の軒丸瓦として知られていたのはA類である。C類については小片で全体の形状については不明な点が多いため、参考資料として第26図、図版22下、23上にあげた同種の江戸時代出土の瓦について観察する。

A類（第16、17、18図1～20図版18上中）八葉からなる単弁蓮花文軒丸瓦である。瓦当の直径は判明しているものを例にとると17～20cmを測る。中房径は5.3cmのものが多く、中房には径約0.8cmの1+6の蓮子を有する。中央に配された蓮子とそれを取りまく蓮子に差は認められない。花卉は弁長4.8cmを測り、隆起が少なく幅広である。最大幅は3.0cmを測る。花卉の先端は反り上るのを特色とする。間弁は、先端で太くなり、花卉同様反り上るのを特色とし、4.8cmを計るものが一般的である。周縁の形は直立縁で幅1.3cm前後の素文で、高さは内区の文様面より高い1.5cm前後の高縁である

瓦当と丸瓦の接合は印籠つき法による。まず范の内区部分に粘土を押しこみ、瓦当面の約 $\frac{1}{2}$ の厚さまで粘土を押しこんだところで丸瓦との接合面を平滑に仕上げ、丸瓦をその部分に押しあて残りの $\frac{1}{2}$ に粘土を付け加え、指頭による押圧でこれを接合している。その際、丸瓦の接合部内面はあらかじめへら状工具によって何条かの溝が刻み込まれている。これは両者の接合をたやすくするためのものであると考えられる。

胎土中には片岩・石英・長石を含む。焼成は全て二次焼成を受けており、本来の焼成については不明である。色調は黄褐色を呈するものが多い。

B類（第18図20～24、図版18下、19上）A類同様八葉からなる単弁蓮花文軒丸瓦である。瓦当の直径は約18cmを計る。中房径は3.1cm、中房には径約0.7cmの1+4の蓮子を有する。中央に配された蓮子とそれを取りまく蓮子には差はない。花卉はA類と比較すると幅狭で、花卉中にやや大型の溝によって明確に区画された子葉を有する。花卉の長さは4.5cmで、最大幅1.5cmを計り、子葉の長さは2.5cm、最大幅1.5cmを計る。花卉の先端は尖っており、A類は先端のみが反り上る形状であるのに対し、弁全体が弓なりに反っている。間弁は花卉よりも高く隆起し、花卉をはさんで間弁同士がつながり、花卉を取り巻く形状を呈している。周縁の形はA類と同じく直立縁で幅約1.5cmの素文で、高さは内区の文様面より若干高い1cmの高縁であるが、間弁よりは低い。

瓦当と丸瓦の接合は印籠つき法による。まず范の内区部分に粘土を押しこみ、瓦当面の約 $\frac{1}{2}$ の厚さまで粘土を押し込んだところで丸瓦との接合面を平滑に仕上げ、丸瓦をその部分に押しあて残りの $\frac{1}{2}$ に粘土を付け加え、指頭による押圧でこれを接合している。

胎土は精緻で片岩・石英・長石を含む。焼成は二次焼成を受けている。色調は暗灰色を呈している。

C類（挿図7、第25図、図版22、23）八葉からなる素弁蓮花文軒丸瓦である。瓦当の直径は約25cmを計る大型品である。中房径は約5cmで、中房には痕跡から1+6の蓮子を持つと考えられる。花卉は扁平で隆起は少なく花卉の中軸線上に稜線がみえる程度である。弁長は6.3cm、最大幅は4.2cmを計る。花卉の先端は尖り、反り上っており、A類と類似し、間弁は6.2

軒丸瓦計測値

単位 cm

	直 径	中房径	蓮子数	弁区径	弁 長	弁 幅	弁 数	外 縁		
								幅	高 さ	文 様
— 1	(19)	5.3	1+6	15.0	4.8	3	T 8	1.3	1.4	素
2	—	5.3	1+6	15.0	4.8	3	T 8			
3	20.2	5.3	1+6	15.1	4.7	3	T 8	1.4	1.5	素
4	18.6	—			4.8	3	T 8	1.5	1.5	素
5	17.1	5.3	1+6	14.6	4.6	2.8	T 8	1.2	1.5	素
6	()	(5.3)		14.7	4.8	2.8	T 8	1.3	1.5	素
7	—	5.3			4.7	3	T 8			
8	—	5.1			4.8	2.7	(T 8)			
9	—	(5.2)		14.6	4.8	3	T 8		1.4	素
10	—				4.8	2.9				
11	—	5.2	1+6		4.5	2.8	(T 8)			
12	—					3				
13	—				4.8	2.9				
14	—					2.7				
15	—				4.6	2.8				
16	—				4.8	2.9				
17	—							1.5	1.3	素
18	—				4.6	2.9				
19	—				4.7	2.8				
20	—					2.6				
21	—	3.1		13	4.5	2.3	(T 8)	1.4	0.9	素
22	(18)	3.1	1+4	13	4.5	2.3	T 8	1.5	1.1	素
23	—									
24	—					2.4				
25	—							1.8	1.2	素
挿図7	—	(5.0)	1+4	—	6.3	4.2	(T 8)			

T 単弁

cmを計り形状はB類に類似する。しかしB類の如く高く隆起するものではない。周縁は直立縁で幅2~2.4cmの素文である。高さは内区の様面より高い2.5cmの高縁である。

瓦当と丸瓦の接合はA・B類と同じく印籠つき法による。技術的にはA・B類と同じであるが相異点はC類の



挿図7 C類軒丸瓦(瓦)

場合、范に粘土を押し込む際、約1/2押し込んだところで、丸瓦を差しこんでいる点である。これは瓦当が大型であるためと考えられる。胎土は片岩・石英・長石を含み、A・B類と同質である。焼成は二次焼成を受けており、色調は暗灰色を呈する。

軒平瓦 確実に軒瓦として使用されたと考えられるものは出土していない。出土した瓦の中で比較的厚さのある瓦が出土している。全体の中ではその占める割合はごく小数であることから、あるいはこの種の瓦が軒平瓦として使用されていたかもしれないが、顕著にそれを示すものは出土していない。

平瓦(第19~23図、図版19下~20) 平瓦の凸面にみられる叩きの文様からはA~Oの15種が確認されている。その中でA~Gは正格子文様、H~Kは斜格子文様、Lは平行条線文様、M・Nはすり消文様、Oは縄叩き文様である。

このうち、最も多いのはEで、以下J・I・C・BとなりA・D・E・G・H・K・L・M・N・Oについては非常に少ない。塔跡周辺ではE類・J類が圧倒的に多く、とりわけE類が顕著である。YG-I区拡張区周辺ではE類の優位性は認められるもののC類が多くJ類を凌ぐようになる。YG-II区ではE・C類がほぼ同数の割合で出土している。J類に至っては半数以下に激減する。

O類に分類した縄叩き文様は総計15,547点中わずかに15点を数えるだけである。

出土した瓦はほとんどが破片となっている。良好な資料は数少ないが以下それについて若干の観察を加えることにする。尚、すべて桶巻き作りによるものである。

1は長さ47.8cmを計る。凸面には5~8mmの格子F類の叩き文様を持ち、縦方向にヘラケズリが行なわれ一部消されている部分もみられる。凹面には模骨が顕著にみられる。凸面側に面取りが行なわれている。広端部の弧長は32.7cm、高さ6cmで厚さは2.1cmを計る。狭端部の弧長は27.5cm、高さは4.0cm、厚さは2.1cmである。色調は黄灰色を呈し、胎土中に5mm大の砂粒を含む。二次焼成をうけている。YG-I区Jトレンチ出土。

2は長さ48.0cmを計る。凸面には7mm前後の正格子B類の叩き文様を持つ。凹面は剥離のため布目は痕跡程度である。面取りは凸面側に行なわれている。広端部の弧長は(28.0)cm、高さ4.8cm、厚さ2.1cmを計る。狭端部の弧長は24.9cm、高さ5.4cm、厚さは1.5cmを計る。色調は赤

褐色を呈し、胎土中に1cm以内の砂粒を含む。二次焼成をうけている。NT区溝出土。

3は長さ46.3cmを計る。凸面には斜格子叩き1類を持つがナデによって一部消されている。凹面には椀骨が顕著にみられる。凹凸両面側が面取りが行なわれている。広端部の弧長は30.0cm、高さは6.8cm、厚さは1.6cmを計る。狭端部の弧長は(26.7)cmで、高さ(5.7)cm、厚さ1.5cmを計る。色調は黄褐色を呈し、胎土中に5mm以下の石英・長石を含む。二次焼成をうけている。YG-II区Bトレンチ瓦溜り出土。

4は長さ45.3cmを計る。凸面には斜格子叩き1類を持つ。凹面には椀骨が顕著にみられる。凹凸両面側とも面取りが行なわれている。広端部弧長は(24.0)cm、高さ(5.3)cm、厚さ1.9cmを計る。狭端部弧長は22.5cm、高さ3cm、厚さ1.9cmを計る。色調は黄灰色を呈す。胎土中に3~4mm大の石英・長石を含む。NT区溝出土。

以下5・6・7についてもおおむね同様であるので略する。

丸瓦(第24図、図版21) 出土した丸底の全ては行基葺のものである。1は長さ39cmを計る。凹面には布目が残りに、凸面はナデによって仕上げられている。凹面側に面取りがある。広端部で弧長(20)cm、厚さ1.4cm、高さ(4.3)cm、狭端部で弧長(12.7)cm、高さ6.9cm、厚さ1.2cmを計る。色調は黄褐色を呈し、胎土中に5~10mm大の片岩・石英・長石を含む。NT区溝出土。2は長さ39.5cmを計る。凹面には布目が残りに、糸切り痕が残ることから、粘土板巻きつけによって整作されている。さらに布の縦じ合せ痕、粘土板の重ね目が見られる。凸面はナデによって仕上げられ、凹凸両面側に面取りがある。広端部で厚さ1.6cm、狭端部で厚さ1.3cmを計る。色調は暗灰色を呈し、5~10mm大の片岩を含む。塔跡出土。

3は長さ36.6cmを計る。凹面には布目が残るが1・2に比して粗い。糸切り痕が残ることから、粘土板巻きつけによって整作されている。凸面は主として縦方向のナデによって仕上げられているが、凹凸面とも凹凸が著しい。凹凸両面側に面取りがある。端部にも面取りがみられる。広端部で弧長(17.3)cm、高さ6.4cm、厚さ1.6cm、狭端部で弧長(11.8)cm、高さ5.2cm、厚さ1.5cmを計る。OK区Qトレンチ出土。色調は青灰色を呈し5mm以内の砂粒を良く含む。焼成は良好、堅緻である。

4は凹面に布目が残りに、さらに布の縦じ合せ痕と指頭痕が顕著に残る。凸面は縦方向のナデによって仕上げられている。凹凸両面側に面取りがある。狭端部で弧長11.6cm、高さ3cm、厚さは1.3cmを計る。狭端部端部は凹面側に折り返している。色調は青灰色を呈し、胎土中に石英砂等を含む。焼成は良好で堅緻である。

5は凹面に布目が残りに、さらに布の縦じ合せ痕も残る。凸面は縦方向のナデによって仕上げられている。凹凸両面側に面取りがある。広端部の弧長は18.6cm、高さは7.6cmで厚さは1.8cmを計る。色調は黄褐色を呈し、胎土中に5~10mmの片岩・石英を含む。二次焼成をうけている。塔跡

出土。

6、凹面に布目が残り、さらに布の縦じ合せ痕も残る。凸面は縦方向のナデによって仕上げられている。面取りは行なわれていない。狭端部の弧長は(11.3)cmで高さは5.9cmで厚さは1.0cmを計る。色調は灰色を呈し、胎土中に5mm以下の砂粒を若干含む。二次焼成をうけていると考えられる。YG-I区Jトレンチ出土。

鷗尾片(第25図、図版23下) 厚さ4cmを計る。縦帯と腹部の一部分であると思われる。約2.5cmの縦帯で、段によって区画される鱗を有している。

契斗瓦(第25図、図版22) 平瓦を利用したもので幅8.4cm、厚さ2.8cmを計る。

第2節 土器類(第27・28図、図版24)

奈良時代の須恵器・土師器の出土は非常に少ない。これは調査地点の性格によるものかと考えられる。

1. 須恵器(第27図、図版24)

杯蓋(1)は、径18.5cm、色調は青灰色を呈し、胎土中に微砂を含む。つまみは擬似宝珠様で、天井部は平らで回転ヘラ削り調整がなされている。(2)は復元径19cm、色調は青灰色を呈し、胎土中に微砂を含む。天井部は回転ヘラ削り調整がなされている。(3)は復元径12.4cm、色調は灰色を呈し、胎土中に微砂を含む。天井部は回転ヘラ削り調整がなされている。

杯身(4)色調は青灰色を呈す。底部の形状は平らであるが、中央部でやや下がっている。底部端よりやや内側に八の字に貼付高台が付けられている。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。(5)色調は灰色を呈す。底部の形状は(4)と同様で中央部がやや下がっている。底部端よりやや内側に八の字に貼付高台が付けられている。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。(6)色調は青灰色を呈す。底部の形状は平らであるが、中央部でやや高くなっている。底部外面は指押さえの凹凸がなはだしい。底部端よりやや内側に八の字に貼付高台が付けられている。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。(7)口縁部径25.0cm、器高14.0cmを計る。色調は暗灰色を呈す。口縁部はわずかに外反するが、ほぼ直線的に上方へ延び、端部は丸く仕上げられている。口縁下方は回転ヘラ削りがなされている。底部の形状は平らで、八の字に貼付高台が付けられている。焼成は良好で胎土には砂粒を含む。(8)口縁部径10.2cm、器高4.2cmを計る。色調は青灰色を呈す。口縁部は外反ぎみに立ち上り、端部は丸く仕上げられている。調整は回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切りによる。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。(9)口縁部径11.2cmを計り、色調は暗青灰色を呈す。口縁部は外反ぎみに立ち上がり、端部は丸く仕上げられている。調整は回転ナデで、底部は回転ヘラ切りによる。焼成は不良で軟質である。(10)口縁部径11.5cm、器高は4.0cmを計る。口縁部はやや内彎ぎみに立ち上がり、端部は丸くおき

めている。底部はやや凹凸のある平底で回転ヘラ削りによるものである。仕上げは回転ナデ調整。色調は青灰色を呈し、胎土中に1mm以下の白色砂粒を含む。焼成は良好・堅緻。(11)口縁径8.8cm、器高は3.0cmを計る。口縁部はやや外方向に開き、端部は丸い。底部はやや丸味をもつ平底で回転ヘラ削りによる。仕上げは回転ナデ調整。色調は灰色を呈し、胎土中には1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好・緻密。内面には煤状の付着を見る。

壺(12)把手付の壺で、肩部付近で最大径を計る。色調は青灰色を呈す。調整は丁寧で、器面は内外とも回転ナデ調整による。焼成は良好で胎土中に微砂を含む。

甕(13)復元径25.5cmを計る。色調は青灰色を呈す。口縁部は外反して立ち上がり、端部でやや内傾する。焼成は良好で胎土中に5mm大の石英・長石を含む。(13)復元径28.0cmを計る。色調は青灰色を呈す。口頸部は外反して立ち上がり、口縁部は外反して上方へ伸びた後内傾し、端部は鋭い。頸部外面は平行叩きの後、カキ目による調整がなされている。内面には同心円叩きが見られる。焼成は良好で胎土中に砂粒を含む。

2. 土師器(第28図、図版24)

1 鍋の破片である。調整は剥離のため不詳。色調は暗褐色を呈する。2～5はYG-I区Hトレンチ包含層より出土した黒色土器である。時期は8C後半と考えられる。6～29はHトレンチとMトレンチにまたがる土壌から出土した。土師器壺は口縁径約12cm、器高約3cmのものが多く、表面が剥離しているため詳細は不明であるが、底部外面に粗い指頭痕を残す。幅の広い平底からやや内彎きみに外上方へ立ち上るもの、稜をもって立ち上るもの、幅のせまい丸味をおびた平底から外上方へ立ち上るものがある。胎土は微砂粒を含む。色調は白黄色を呈している。

土師器小皿は口縁径約8cm、器高1cm前後のものが多く、底部外面には指頭痕が残り、内外面ともナデによって仕上げられている。胎土は微砂粒を含む。焼成は良好で、赤褐色・灰褐色を呈する。

燭台(28)口縁径5.2cm、器高3.5cmを計る。内面には約1cmの突起を持つ。胎土中に微砂を含む。焼成は良好で灰黄色を呈す。

埴(29)口縁径27.5cm。体部にわずかばかりの稜線を有す。胎土は微砂粒を含む。色調は茶褐色を呈する。焼成は良好である。

釜(30)水平に延びる鋳を持ち、外面には粗い刷毛目をも有す。瓦質である。YG-I区拡張区出土。

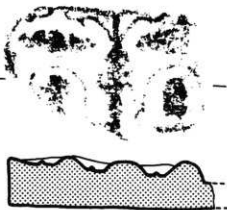
共に14C後半～15Cにかけてのものと考えられる。

第3節 その他の遺物

博仏(挿図8、図版24) YG-II区瓦溜りから出土。縦3.6cm、横5.3cmの六尊連立博仏の断片である。忍冬文による区画を作り、区画内には後に頭光と身光をもつ如来立像が置かれ、頭上には蓮花文の天蓋がかかっている。

鷗尾(第25図、図版22) 江戸時代に出土したと伝えられる。縦約20cm、横14cm、厚さ5cmを計る断片である。

A面・B面には共に単弁八葉の蓮花文が施文されている。両面側面ともケズリによって器面調整が行なわれ、そのためA・B両面の蓮花文は凹凸が乏しく線効のようにみうけられる。一方、A面には段が二個のみみうけられる。間隔は7.5cmである。そのため鷗尾の鱗部にあたると考えられる。この鷗尾片にみられる蓮花文はB類と同范で、従って北山庵寺出土軒丸瓦の一例とも同范である。



挿図8 博仏

第6章 ま と め

調査の基本方針として伽藍と寺域の確認に重点を置いたことは先にも述べている通りであるが、調査区が主に果樹園で塔跡を含む中心区域が墓地であることから、今後に残された課題も多い。

塔跡 調査の結果とさらに白鳳時代に建立された神野々・佐野・西国分・三栖の各庵寺は発掘調査の結果からそれぞれ12m・12m・13.8m・9.2mを測ることから、当庵寺の規模も10m前後と推察できよう。

金堂跡 一般的に南面すると考えた場合、塔跡の西側で検出された「L」字形のプランを呈する溝状遺構は東西18m、南北18mを測るが、5間×4間の18×15mが一般例であることと、溝には瓦が極めて少ない点、塔跡推定基壇縁とは約5mの距離と極めて接している点等から金堂に付随する遺構とは考え難い。塔跡東側のT G区・O S区に設けたトレンチにおいても金堂跡と想定できる遺構は検出されていない。

塔基壇最下層から瓦片が多量に出土することから、塔建設に先だって金堂が建立されていた可能性があることは以前にもふれた通りである。^(註5) 鷗尾片の出土はそれを裏づける資料である。出雲国に顕著にみられるような一堂塔のみを造立ということにはならず、削平により消失したものと考えられる。^(註6)

講堂跡 YG-I区に設定したAトレンチのN24の位置に溝状遺構を、それより12m北側N36において東西に延びる地山整形を検出した。この溝状遺構と地山整形に囲まれた一帯は瓦が多く

堆積しているが、いずれも近世遺物が含まれている。溝状遺構はわずかばかりの痕跡で、地山整形についても調査区の限定と東側は墓地であることから性格については明らかにできなかった。南面する場合は法起寺式あるいは法隆寺式の何如かの伽藍配置を呈すると推測されることから講堂跡を示す遺構とも考えられるが今後の課題として残る。

門跡 OK・HG両区でトレンチによる調査を実施したが検出できなかった。

坊舎跡 YG II区とYG I区の北端で何棟かの掘立柱建物跡を検出している。全面調査が不可能なため規模あるいは性格については不明であるが、この地区に瓦を除くいわゆる日常雑器の出土が集中することから坊舎区域の可能性が高い。

しかしながらSB-04とN60で検出された東西に延びる地山整形痕、瓦溜りが重複する事実は後者が伽藍あるいは寺域を画す遺構とした場合疑問の残るところである。

その他の遺構 OM区三棟の掘立柱建物跡を検出し、SB-01については南北に棟を持ち3間×2間の規模であることと、YG-Ⅱ区の地山整形痕、瓦溜りの存在から鐘樓・経藏としての可能性を第Ⅰ次調査の段階では示唆^(註7)したが、他の二棟の建物と同様、倉庫跡として考えておきたい。また、NT区溝1とOM区溝は方向及び堆積土の状況から同一溝と考えられYG-Ⅱ区地山整形痕とも方向と距離に共通性が認められる。このことは三者は同一のもので、主要堂塔を画する遺構と考えることもできる。さらにこの溝の南北線は取休山から派生した小尾根の山裾の延長線上にもあたる。

しかしながら前述の掘立柱建物跡との重複の事実は疑問として残る。

寺域 断定できる資料は得られなかったが、地形的な諸条件から以下のことが推察される。南限については取休山の山裾がS60まで迫り、その山裾には古くからの調月、最上地区を結ぶ唯一の道が縫っており、おおむね旧状を呈していると考えられることから塔から60m以内であったと思われる。北限については佐曾池と呼ばれる深い浸触谷が入りこんでおりNM区ではその痕跡を確認している。その地点はおおむねN90にあたる。また、水田の区画でいえばYG-Ⅱ区とNM区の境界は約1mの比高差が認められ、この地点はN75にあたる。隣接するOM区においてはN80以北は自然傾斜を示し、明瞭な遺構が存在しないこと等からN75～N90に至る付近が北限と考えられる。東限については、取休山から張り出した小尾根(NO区)とOK区は最高3mの比高差があり、この延長線上にNT区の溝とOM区の溝が位置している。そのため堂塔を画すると共に東限を示すものとも考えられるが、OM区ではさらに外側に倉庫群が存在することから尚検討の必要がある。西限については第1図でも明らかにように南北にW30の付近は1.5～2mの比高差をもつ段状地形となっている。この一帯は小字名を尾岡と称し、現在も調月・最上地区の境界とされている点と、烏羽院宇下文抄写には莊園の四至の西限として記されていることから当時の寺域をそのまま踏襲したのではなからうかと思われる。

あえて推察するならばその寺域は南北150m以内、東西は最大N O - II区・O S区・T G区に延びる段状地形よりは内側と考えられるところから90~110mが可能であろう。

埴仏 いわゆる六尊蓮立埴仏で飛鳥山田寺出土といわれる埴仏(註8)と同範と思われる。他に奈良県御所市朝妻鹿寺(註9)・和歌山県伊都郡かつらぎ町佐野鹿寺でも出土し、南海道に沿った仏教文化の一つの伝播形態として捉えることができよう。

建立年代 紀伊国においては飛鳥時代建立の寺院は一字もなく、白鳳時代以降建立された寺院ばかりである。その現象は大化改新後の造寺奨励政策によるものと解される。そこには寺院を収公からまぬがれるための私有財産のかくれみのに利用する意図(註10)と寺院造営を援助し、同時にこれを通じて、それら氏族の権威を利用しながら旧体制をしいに律令体制に組みかえようとした政治姿勢(註11)がうかがわれるのである。

地方寺院造立に際し、「主たる郡に一個寺程度の郡単位の寺院があり、これらを中核として周辺の後進的郡領寺院や一郡内数個寺を数える郷単位の寺院を派生させて各地域ごとに小文化圏を構成する現象がみられる」(註12)中で紀伊においても瓦から見た場合、郡・郷の単位におけるグループング(註13)は可能であるが、各寺院址の実体を解明するまでには至っておらず、今後の課題である。

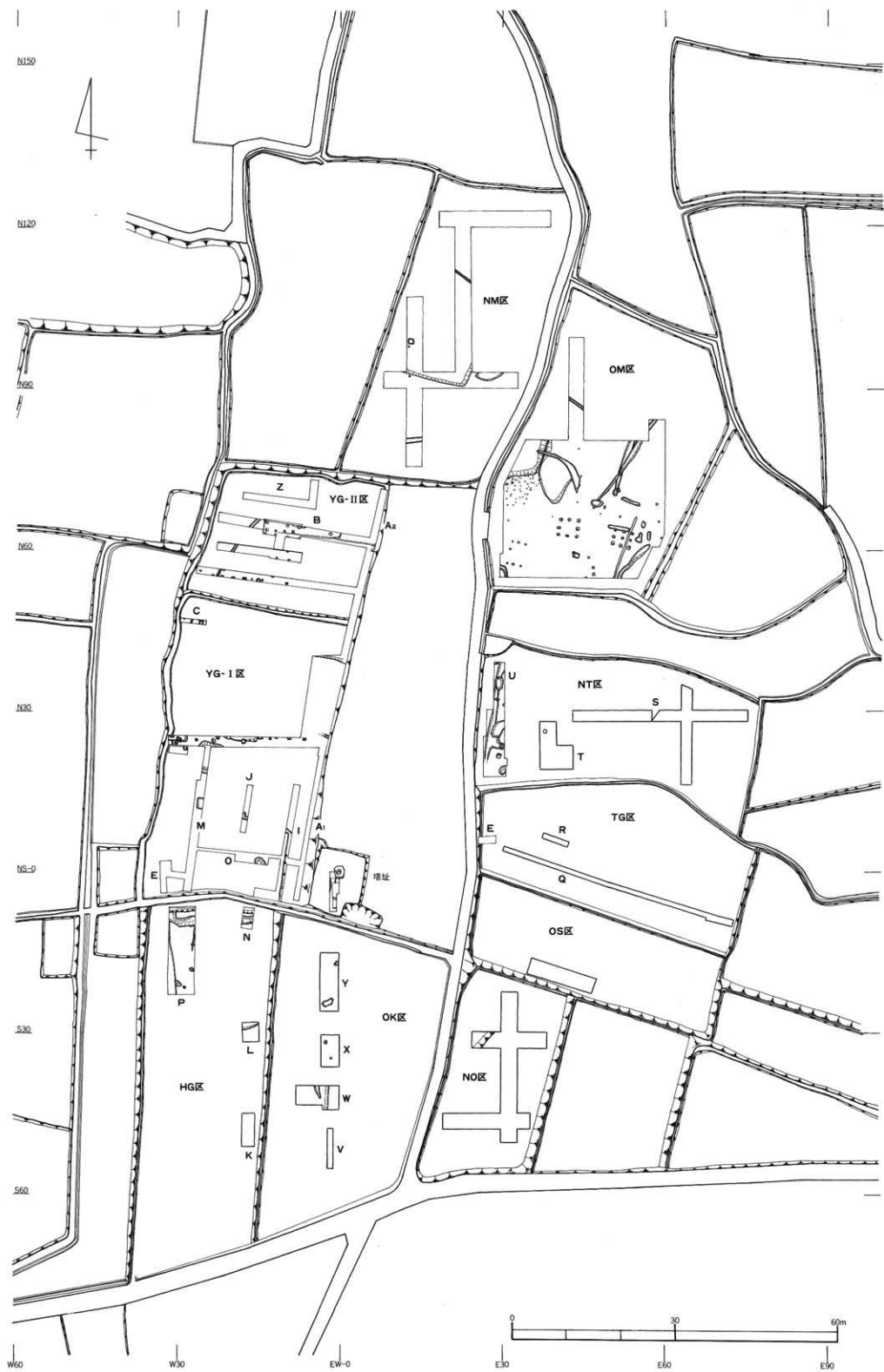
当鹿寺の造立については塔基壇中から出土した須恵器から陶色編年IV型式I段階に比定できることから他の南海道沿いに展開された寺院とほぼ同時期（7世紀末~8世紀初頭）に相前後して建立されたと考えられる。(註14)

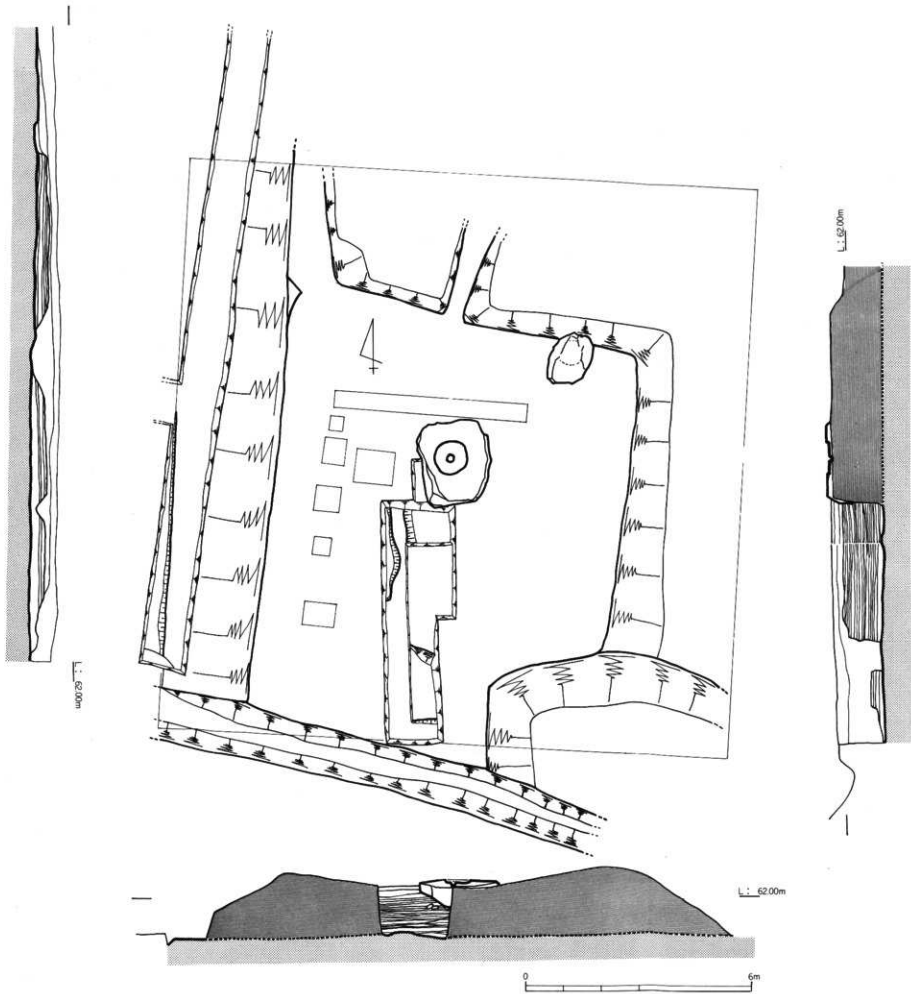
やや時期は下るが、貞観18年4月に、紀伊国に派遣された日置造繩主は、本来紀伊国那賀郡荒川郷に住む地方豪族と考えられている。寺院造立にあっては豪族の旧宅などを転用したり、あるいは隣接地に造立することが数多く見られることから、現在のところこの周辺で奈良時代の遺物を出す遺跡は当鹿寺に近接する最上遺跡(註16)しか知られていないことを考えあわせて、あるいは日置造一族の氏寺として考えることも可能であろう。

周辺の遺跡を含めたより詳細な調査・研究が今後必要である。

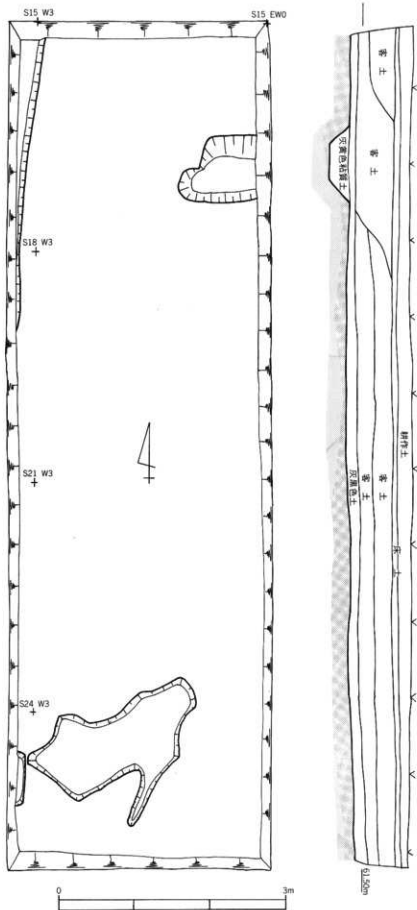
註釈および参考文献

- 註1 『神野々鹿寺跡緊急発掘調査報告書』1977年橋本市教育委員会
註2 『佐野鹿寺発掘調査概報』1977年和歌山県教育委員会
註3 『西国分寺跡発掘調査現地説明会資料』1977年和歌山県教育委員会
註4 『田辺市三栖鹿寺遺跡発掘調査概要Ⅲ』1978年田辺市教育委員会
註5 『最上鹿寺発掘調査概報Ⅰ』1981年和歌山県教育委員会
註6 近藤正『山陰古代文化の研究』1978
註7 註5に同じ
註8 『飛鳥の埴仏と塑像』1976年奈良国立博物館
註9 『御所市朝妻鹿寺発掘調査概報』1977年橿原考古学研究所
註10 小田富士夫「九州初期寺院址研究の成果」『古代文化』17-3
註11 小田富士夫「古瓦よりみたる飛鳥・白鳳期の寺院」『古代の日本』9 1971年
註12 註11に同じ
註13 註2によってすでに指摘されている。
註14 『陶邑』Ⅰ大阪府文化財調査報告書第28号1976年大阪府教育委員会
註15 蘭田香融「古代海上交通と紀伊の水軍」『古代の日本』5 1970年
註16 分布調査の結果による。

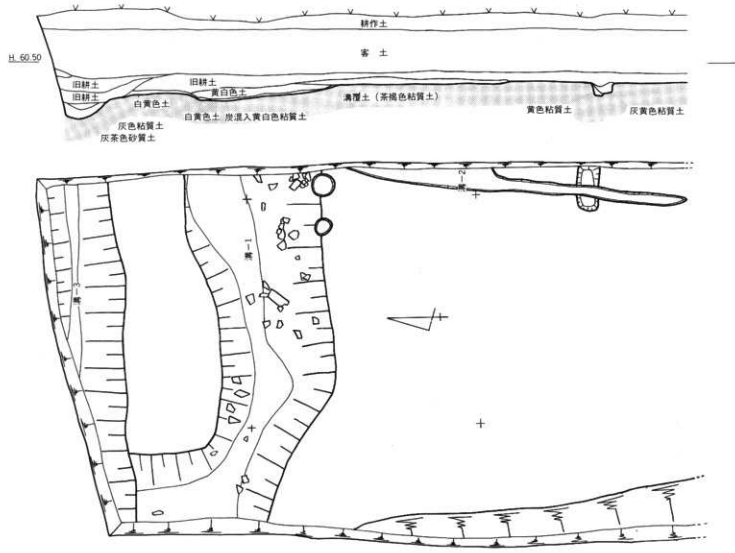




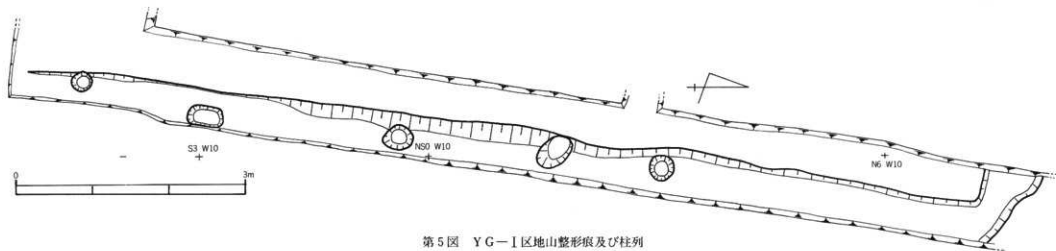
第2図 塔跡平面実測図



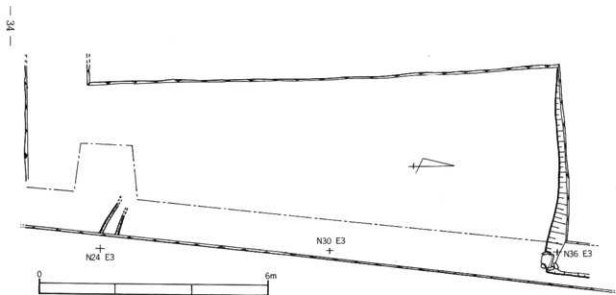
第3図 OK区Yトレンチ平面実測図



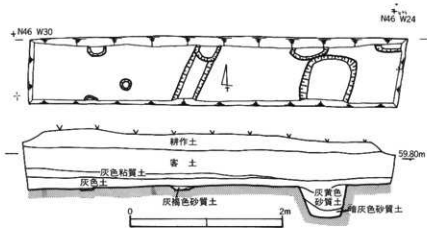
第4図 HG区Pトレンチ平面実測図



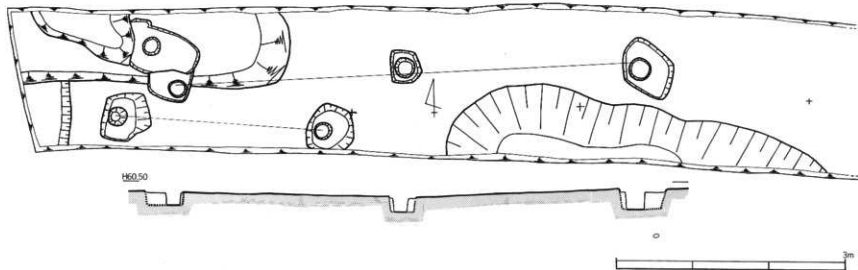
第5図 YG-I区地山整形痕及び柱列



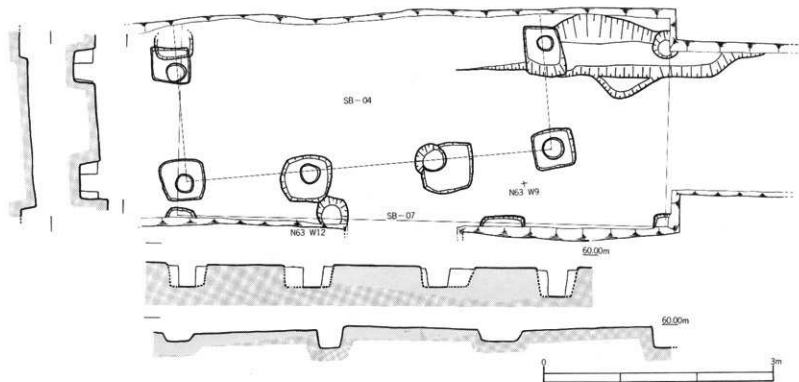
第6図 YG-I区拡張区



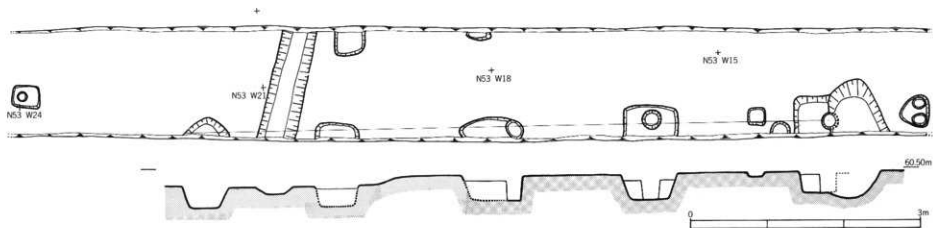
第7図 YG-I区Cトレンチ平面実測図



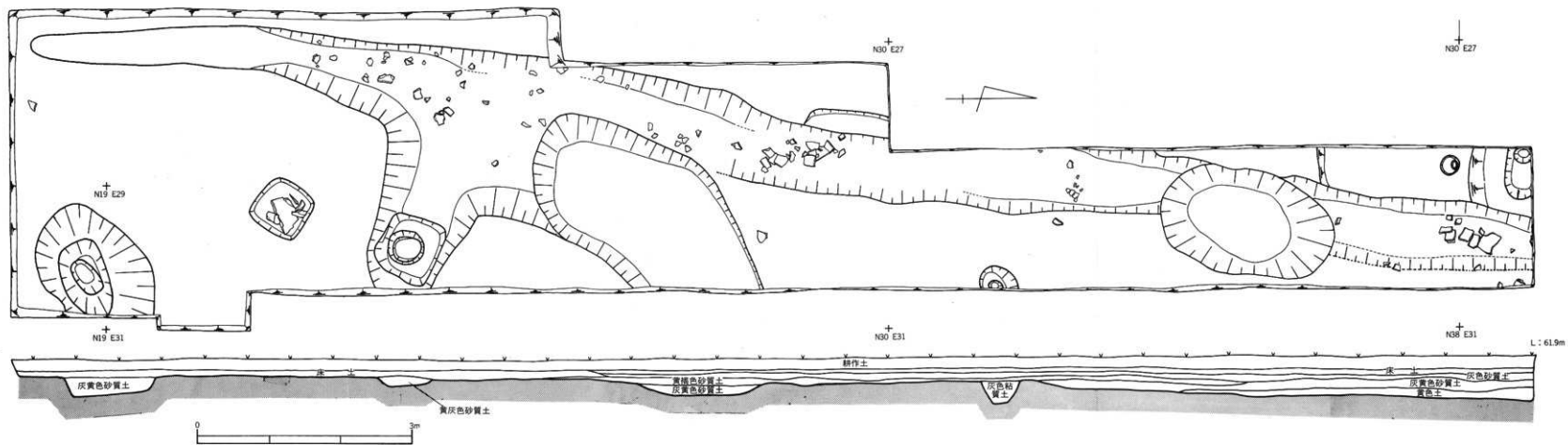
第8図 YG-I区Hトレンチ平面実測図



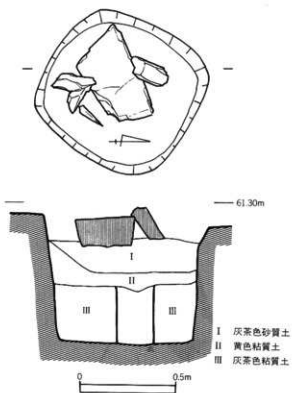
第9図 YG-II区Bトレンチ掘立柱建物跡 (SB-04、07)



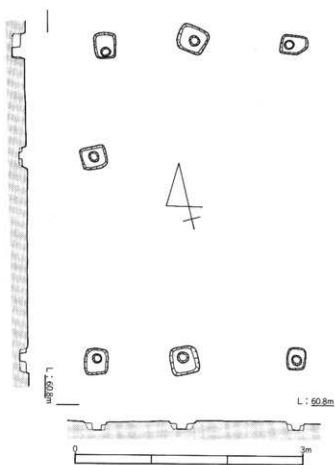
第10図 YG-II区Gトレンチ掘立柱建物跡 (SB-05)



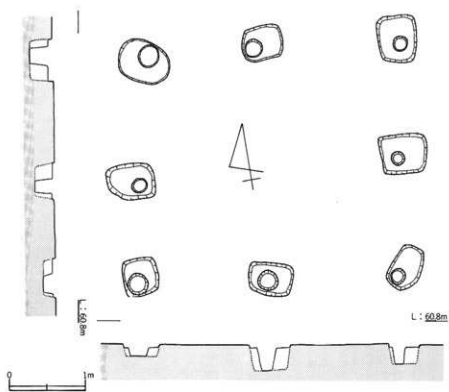
第11图 NT区溝1と掘立住列



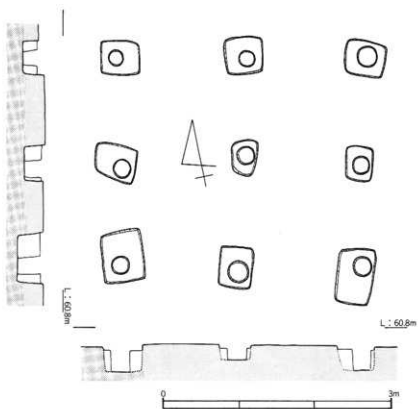
第12圖 NT区柱穴断面



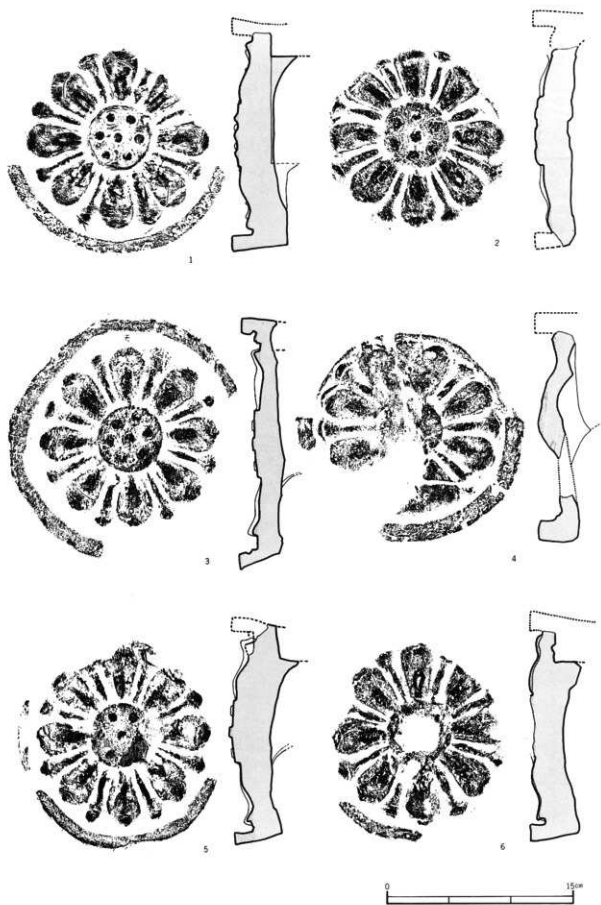
第13圖 OM区掘立柱建物跡



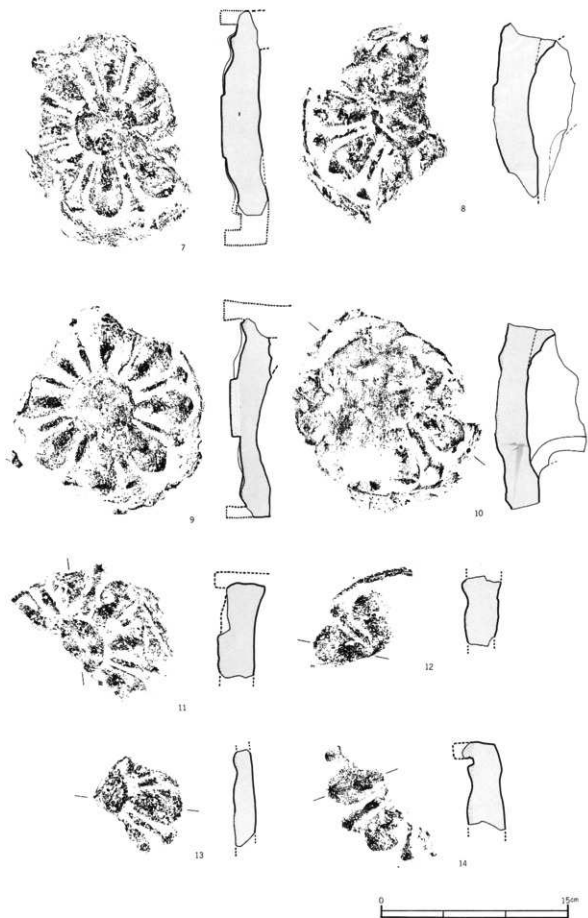
第14图 OM-I区掘立柱建物跡 (SB-02)



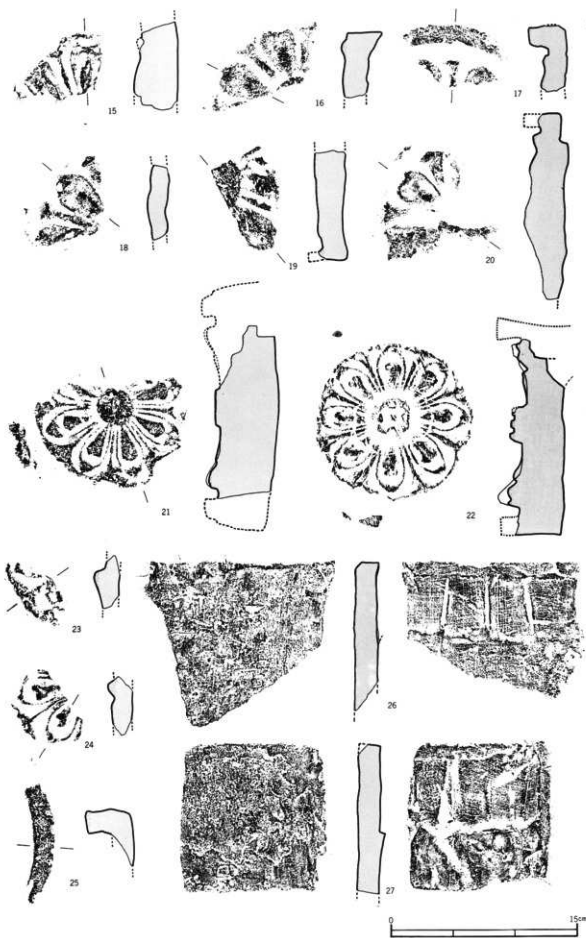
第15图 OM-I区掘立柱建物跡 (SB-03)



第16图 出土軒丸瓦(1)



第17图 出土軒九瓦(2)



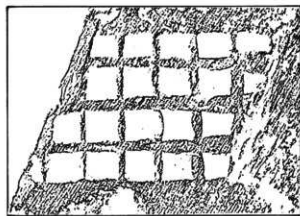
第18図 出土軒丸瓦(3)



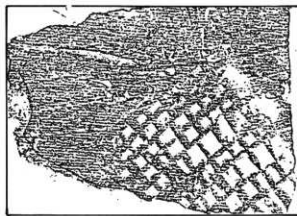
A



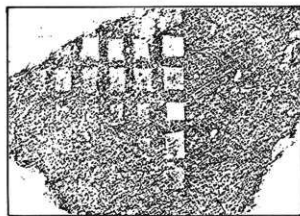
E



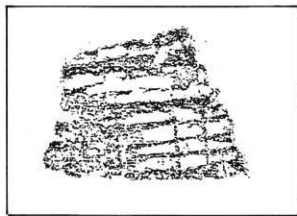
B



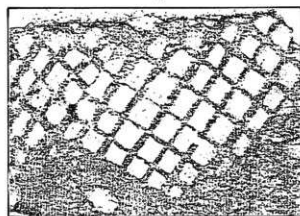
F



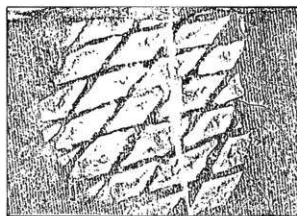
C



G

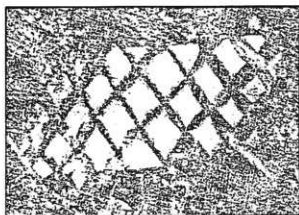


D



H

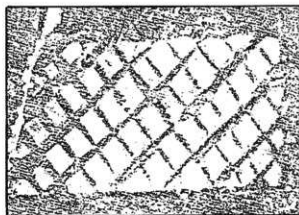
第19回 平瓦叩き文様



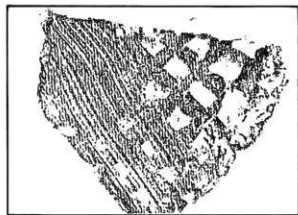
I



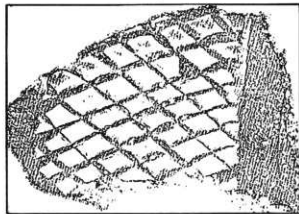
M



J



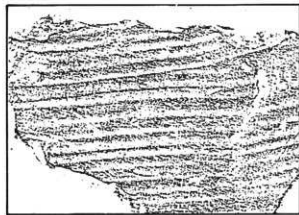
N



K

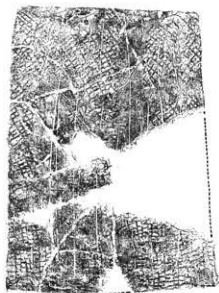


O

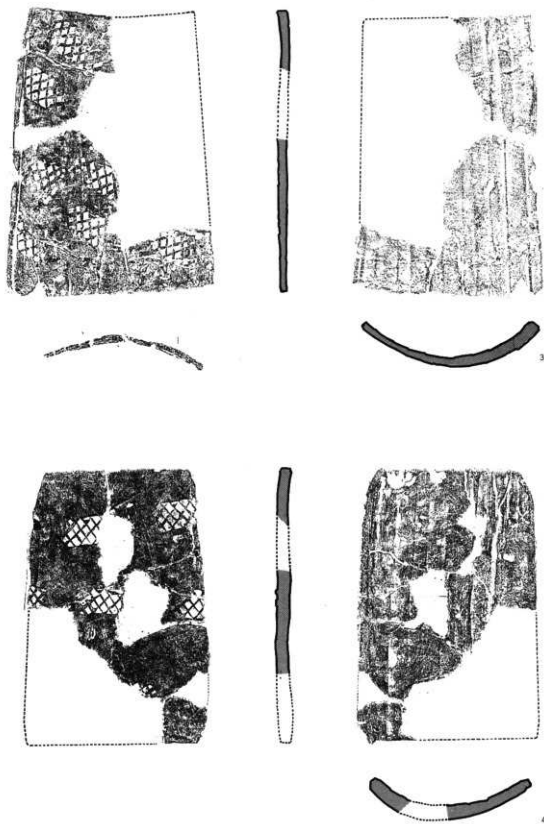


L

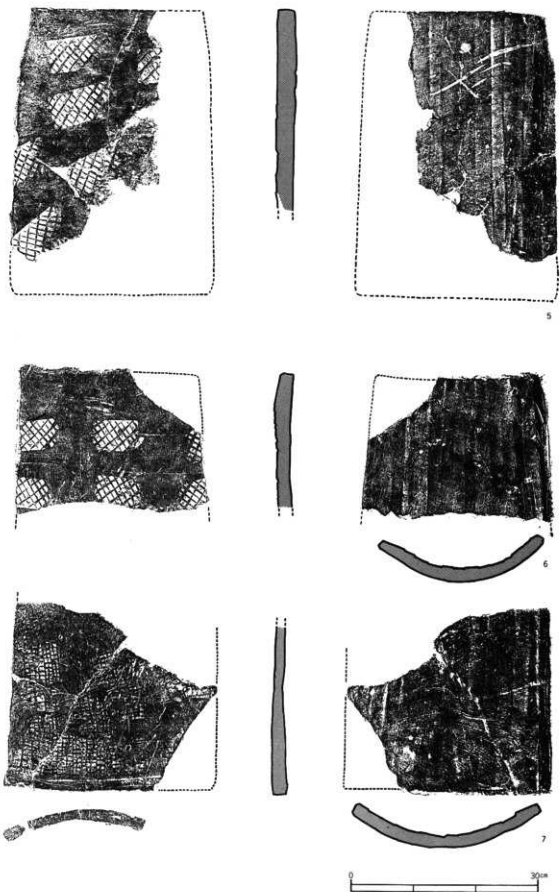
第20図 平瓦印き文様



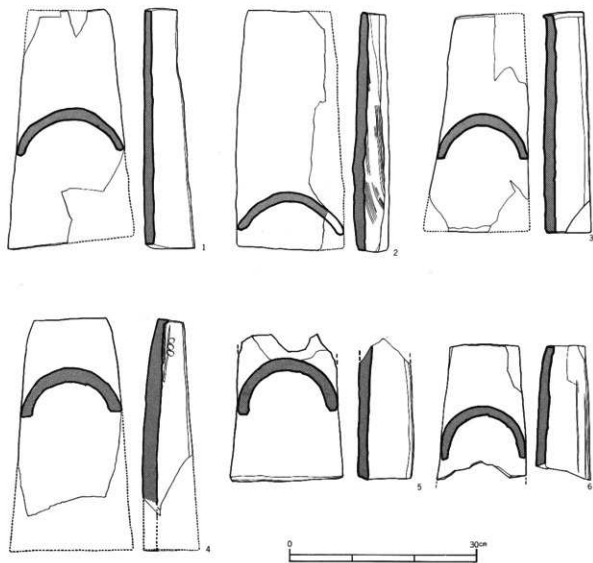
第21圖 出土:平瓦(1)



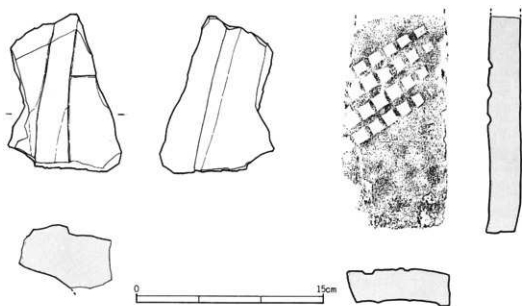
第22图 出土平瓦(2)



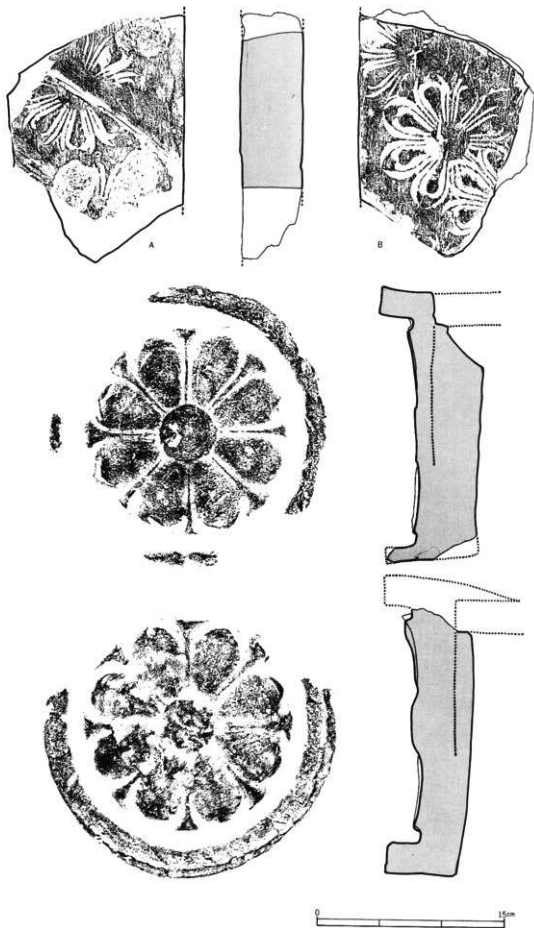
第23图 出土平瓦(3)



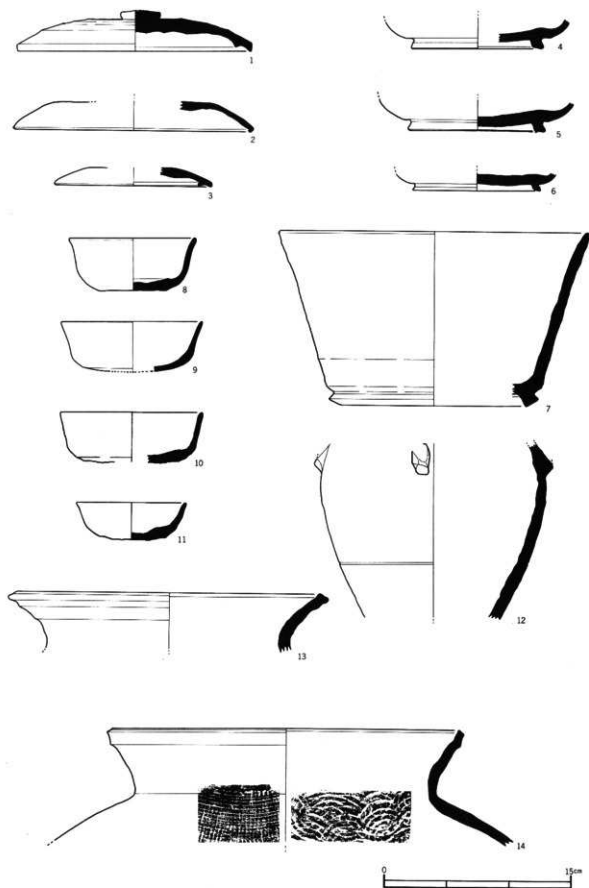
第24図 出土丸瓦



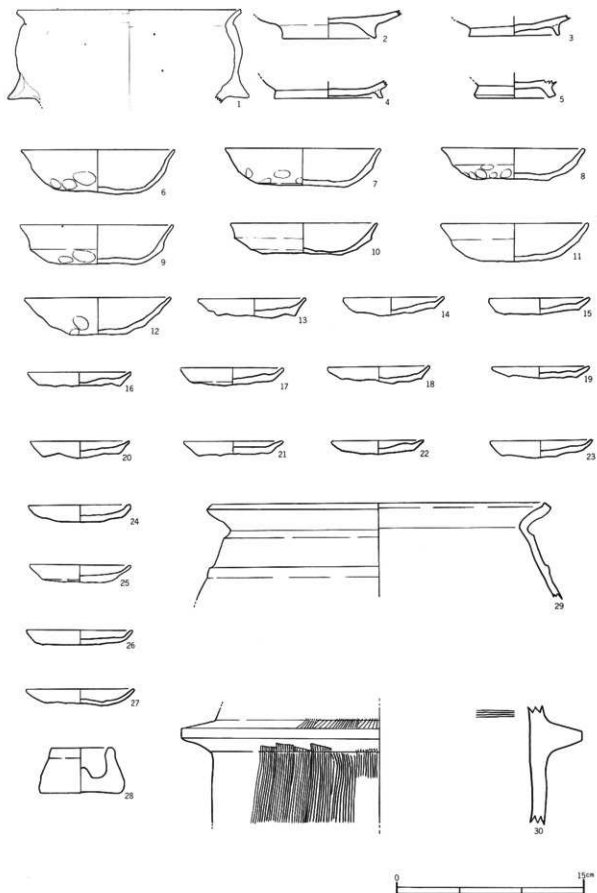
第25図 鷗尾片と榎斗瓦



第26図 伝・最上廃寺出土 鷗尾片・軒丸瓦



第27图 出土遗物(1)

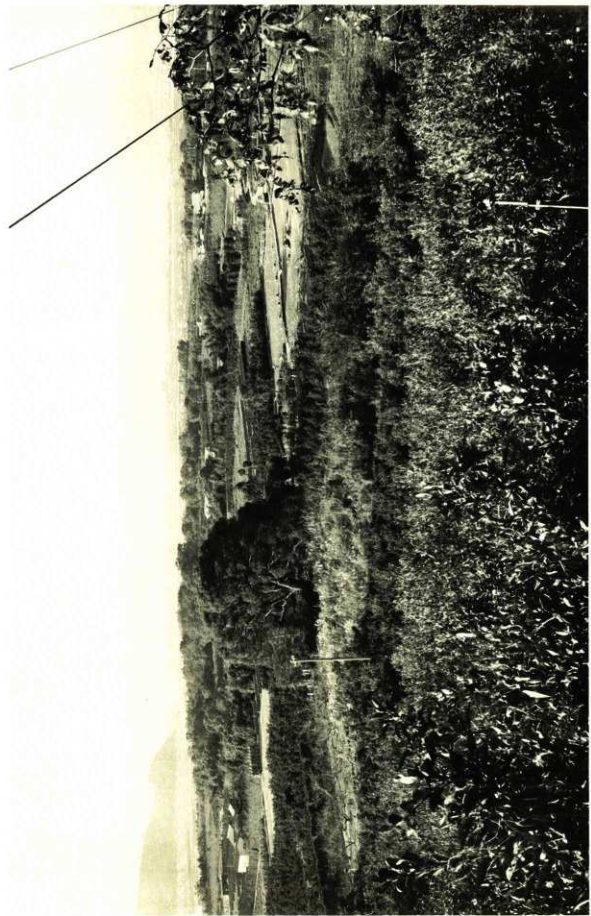


第28図 出土遺物(2)

圖 版



上京からみた最上庵寺とその周辺





塔跡基壇の現状



塔跡心礎石



塔跡の調査



塔跡の調査 (取込の状態)



塔跡基壇（心礎石と版築）



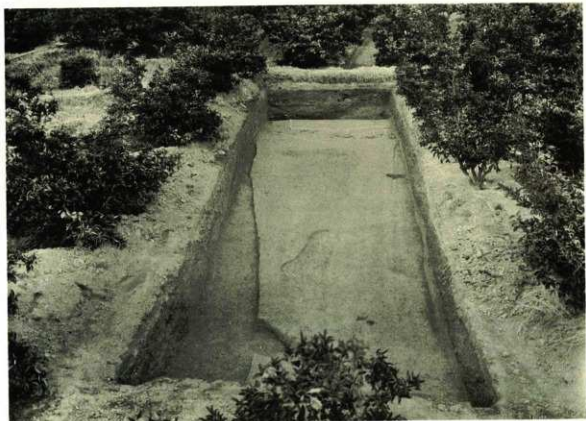
YG-I区 Aトレンチ地山整形痕



OK区 Yトレンチの調査



OK区 Xトレンチ溝状遺構と段



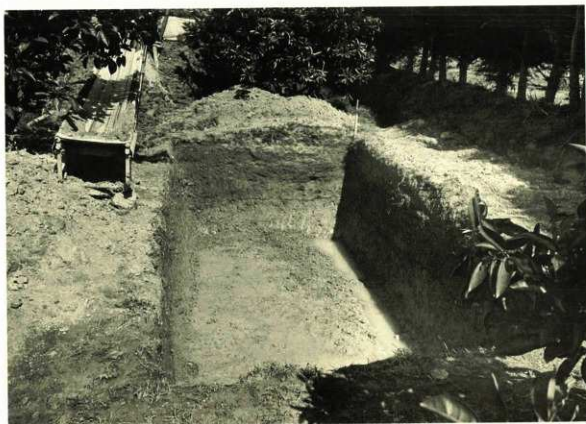
HG区 Pトレンチの調査



HG区 PトレンチSD-1断面



HG区 Nトレンチの調査



HG区 Lトレンチの調査



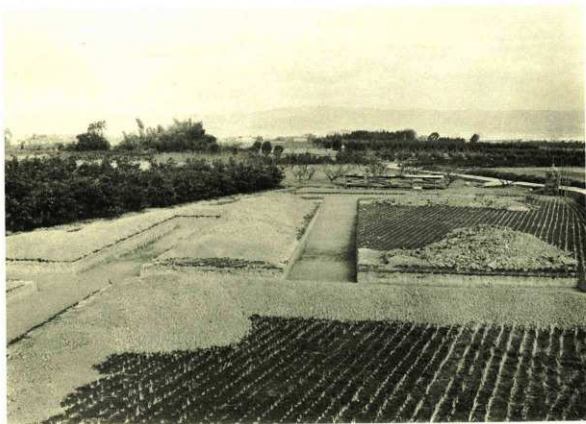
NO区の調査



OS区の調査



T G区の調査



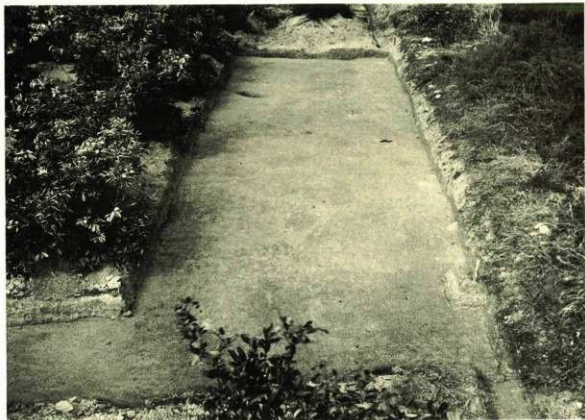
N M区の調査



YG-I区 Iトレンチ地山整形痕



YG-I区 Cトレンチ掘立柱建物跡 (SB-6)



YG-1区 Aトレンチ拡張区の調査



YG-1区 Bトレンチの調査



YG-II区 A₂トレンチの調査



YG-II区 Gトレンチ掘立柱建物跡 (SB-5)



YG-II区 Bトレンチ地山整形痕と瓦出土状態



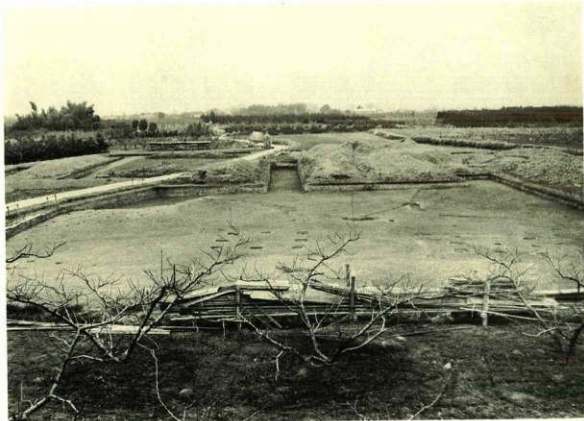
YG-III区 Bトレンチ掘立柱建物跡(SB-4)



NT区 Uトレンチ溝1と掘立柱跡



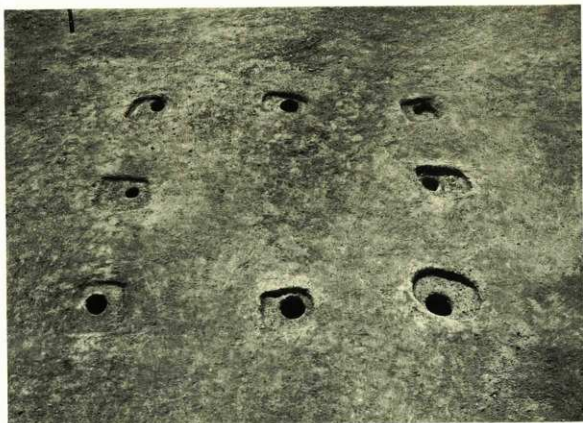
NT区 東限の調査



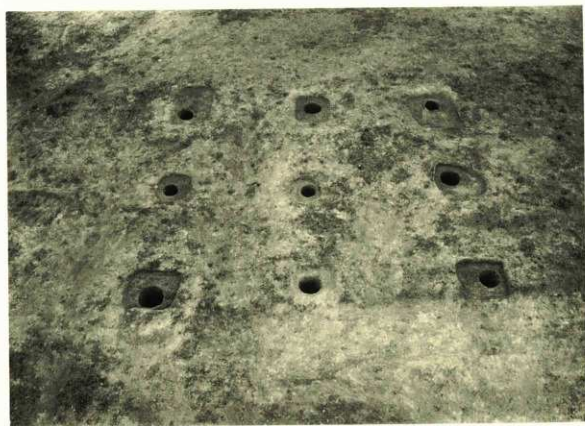
OM区の調査 掘立柱建物跡と柱穴群



OM区 掘立柱建物跡SB-1と溝



OM区 掘立柱建物跡 (SB-2)



OM区 掘立柱建物跡 (SB-3)



A類



A類



B類



B 類



C 類









鴨尾片



菱斗瓦



伝 最上鹿寺出土軒九瓦



伝 最上庵寺出土軒丸瓦



伝 同 鴟尾片



六尊瓦片特征



1



3



9



8



12



6



5



H · 12

昭和59年3月

最上鹿寺発掘調査報告

編集 和歌山県教育委員会
発行

印刷 有限会社 真 陽 社

京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075) 351-6034